〔特別寄稿〕

鬼の名のつく地名の系譜

南　清彦

はしがき

本稿は「鬼の社会経済学——鬼の名のつく人間名，地名，動植物名，物品名の唯物論的考察」という筆者の一連の研究テーマの中で，「地名」の部分をここに掲載するものである。鬼の名のつく地名の場所を，地図上あるいは現地でみるとき，例えば，屹立する高山，奇怪な岩石や凹地のある所，火煙の噴出する火山，熱湯のふき出す地獄，荒々しい渓谷，厳しい峠道や交通の要衝，海蝕による奇怪な岩場や断崖のある所など神秘的な自然条件のある場所が多い。又，それ以外に，修験道の対象となった吉野熊野や岩木山などの霊地も存在する。このようなところを，一般人や修験者たちが鬼のいる所と呼んだのは，結局のところ，奇怪な地形や地質をつくり出した自然のエネルギーを，人力ではなく神秘的な鬼の仕業と考えたこと，又，修験道や陰陽道などの駆使する各種の呪術についても，彼らのもつシャーマン(鬼神)的な力によると思ったこと——あるいは彼らによって，そのように信じこまされたこと——によっている。

さて，本稿の研究および叙述の方法としては，鬼の名のついた地名および鬼と関係をもった人間（修験者を含む）の活躍した場所を，国土地理院の地図や各種の地名辞典などから全国で約180カ所を選び出し，その系譜(自然的および社会経済的背景）を明らかにせんとしたのが本稿である。そのルートについては，すでに解説済のところもあるが，なお，不明のところあるため，筆者は全国各地の市町村などに電話で問合わせると共に，筆者の推定も加えて簡単な説明を行った。まちがっている所は御教示を乞いたい。(なお，地名の配列は北から南へと行った)。

ここで，地名研究の目的について一言すると，地名がその所在地の景観や歴史や伝説などをかなりよく反映しているという伝統的考え方を筆者もまた受け継いだ。地名という観念形態の分析が筆者の地域研究の一つの支えとなることを期待したからである。

（注）なお，筆者が本稿で「鬼と関係ある人間」と呼んだのは，①渡来人，異文化の外国人，②国内でも異文化の先住民，山村へき地の人々，③公害を流す人，有用資源の独占者，④凶悪人間と名指された人々（鬼退治の対象者)，⑤祖霊，死霊，怨霊と関係の深い修験者，⑥厄日，厄年などをおこす悪霊を折伏する呪術者(修験者や陰陽師)，⑦天変地異や凶作をおこさせる悪霊を封じる山岳宗教などと関係する場所や人々をいう。又，動植物や物品の中にも鬼の名のつくものとしては，姿形の大きいもの，力の強いものなどがある。例えば，オニヤンマ，オニヒトデ，オニユリ，オニハス，オニガワラ，オニゴロシ（酒）などである。但し本稿ではこれらの鬼の名のつく動植物や物品の所在地については割愛し，別稿とした。

北海道　鬼侏（オノコ）　（北海道）

大和政権は，七世紀になると，全国支配をめざして北海道や東北地方にも，武力を進めた。そのさい，アイヌなど北方人種を鬼侏(オノコ)といった。オノコには，召使あるいは下男の意味もあったためである。ともあれ近畿地方の農耕民と異り，北方の人々には漁業や狩猟などの仕事に従事する人も多く，文化的にも異っていたため，オニという名がつけられたものとおも

う。(司馬遼太郎『街道をゆく』朝日文庫　参照)

北海道　鬼脇　　(北海道　東利尻町)

東利尻町は利尻島にあって，漁業と高山植物に恵まれている。

北海道における鬼は旧住民や渡来人などとの関係が多い。鬼脇をオンネツキと読むのもアイヌとの関係が深いとおもう（川尻に木があるところ)。

北海道　鬼鹿　　(北海道　小平町)

小平町（オビラ）は旭川の西70kmの日本海沿の漁村で，かつてはニシン漁業で栄えた。

鬼鹿（オニシカ）は，異文化の人をさしたのか，あるいは，大きな鹿がいたのかもしれない。

北海道　鬼志別　　(北海道　猿払村)

猿払村は北海道の最北部にある（オホーツク海沿)。

鬼志別はアイヌ語のオヌシンベツから来た語で，川口に魚の多いところという意味である。

青森県　岩木山（岩鬼山）(青森県　岩木町)

岩木山1,625mは津軽富士ともいわれ，鳥海火山脈に属する休火山であり鉄が出る。それと関係して修験道の霊地でもある。岩木山は岩鬼山，岩城山から転化したといわれている。

岩木山は，津軽富士の名のつくように均整のとれた美しい円錐形になっている。津軽の人々は，この山を神として崇拝し，四季の変化や，雪や雲の動きを観察した。山麓の岩木山神社は，坂上田村麿がエゾ平定のとき，この社を奉斉したという。厳鬼山（ガンキ）1,456mは，岩木山のウシトラ方向の外輪山。

青森県　恐山　　(青森県　むつ市)

恐山（オソレザン）は下北半島北西部にあって，むつ市の飛地となっている。恐山は硫気孔や地熱がふき出し，周囲は原生林におおわれ，カルデラ湖である宇曽利湖が不気味に存在する。死者の霊は一度はここへ参るといわれ，秋祭りには「イタコの口寄せ」が行われる。

この恐山（おそれざん）の山上に，長さ六米程の大きな青岩がある。ここへ来た人は，この大石を鬼石と言った。生前の行いの悪い者は，地獄に落ちるといわれ，そのさい，この大石を裁きの鬼とみたのである。

青森県　又鬼（又木）　　(東北各地)

又鬼あるいは又木は，東北地方の山村で生活し，古い生活習慣をもち，主として採取生活を行っている人々をいう。例えば，秋田マタギなど。キは木であると共に，生活習慣を異にする鬼をあらわしている。

青森県　鬼沢の鉄鍬伝説　(青森県　岩木町)

岩木山の麓の鬼沢（オニザワ）集落の百姓が，開墾していると，蓑をきて，鉄の大鍬をもった男が突然あらわれ，仕事を助けてくれた。又，水不足で困っているとき，鉄の鍬で堰をつくってくれたというので，村の地名を鬼沢に変えたという伝説がある。ここには鬼神社もある。

このような伝説が生まれた背景として，従来は木鍬を使っていた先住民に対し，鉄鍬をもった渡来系の人々が農作業を手伝ってくれたということから来ているのではないかと，筆者は推定する。

青森県　鬼沢　　(青森県　弘前市)

沢（サワ）というのは，低くて水がたまるとか，渓谷などをいう。鬼というのは，鉄サビかもしれない。

青森県　鬼袋　　(青森県　鰺ケ沢町)

鰺ケ沢町は津軽半島の日本海側にあって，農漁および海上交通の要衝である。種里城なども存在した。

町の中の赤石川は渓流であり，サケなどもとれた。昔，この川に赤鬼の大群がいて村民を苦しめた。そこで大浦光信（津軽藩始祖）がこれを退治した。そのさい，七人の鬼を退治した家来に，褒美に鬼の袋を与えたのでこの地名ができた。赤鬼というのは，おそらく，この土地を支配した先住民のことであろう。

岩手県　鬼ケ城山　　（岩手県　雫石町）

鬼ケ城山（オニガジョウヤマ）1,654mは，雫石町と松尾村との境にあって，西岩手山の噴火口があり，硫黄の煙をふきあげている。この付近には硫黄で有名な松尾鉱山とか，温泉とか，地熱発電所などがあり，各種資源が豊富である。古代人はこれを鬼の仕業とみたにちがいない。なお，この付近には縄文遺跡も多い。

岩手県　鬼死骸　　（岩手県　一関市）

岩手県一関市旧鬼死骸（オニシガイ）村の由来として，平安時代に坂上田村麿が，エゾの首長大武丸を鬼と言いたて，その首を切った場所であるとされている。

大竹丸は里の婦女を誘拐したり，金銭を奪ったというように罪をでっちあげられたが，実は大和政府がエゾ支配を行うための口実とみてよい。

なお，坂上田村麿のエゾ征伐の話は，奥州の各地に存在する。例えば，次にのべる鳴子町の鬼首とか，又，平泉町の達谷窟（タツヤクツ）にもある。

他方，エゾの首長の首については，例えば，水沢市の蘇民祭（ソミンサイ）で奪いあう蘇民袋の中味であるともいわれている。

岩手県　鬼越沢　　（岩手県　平泉町）

平泉町は，岩手県の南端にあって北上川に沿う農村地帯。

大武丸の首が，坂上田村麿によって，はねられたとき，この沢を飛越えたという。

宮城県　鬼首・鬼首峠　　（宮城県　鳴子町）

宮城県鬼首（オニコウベ）は，鳴子温泉の北西部の秋田県へ通ずる国道108号沿に位置している。この地を鬼首というのは，平安初期の頃（九世紀），坂上田村麿が，この地にいたエゾの首長大竹丸の首を切った場所であるからといわれている。

鬼首温泉は，宮城県の鳴子温泉（ナルコ）の北10粁のところにあって，二時間毎に，地鳴りをともなって，熱湯を吹き上げる天然間欠泉（かんけつせん）である。間欠泉は日本では数少なく，この地に現在，地熱発電所がある。

鬼首峠は，宮城県から岩手県へ山越する国道108号の県境にある。（旧仙台藩と秋田藩を結ぶ重要ルート）。ここはきびしい峠道（標高860米）であるうえ，冬は凍結もするため，鬼峠と形容詞をつけたものであろう。

なお，鬼首は，前述の通りエゾを攻めた坂上田村麿が，エゾの首長大竹丸の首をはねた所から，鬼首の名がおこったといわれる（鬼切が鬼首に変わったと）。

蛇足ながら鳴子の地名は，源義経が平泉へ落ちる途中，亀割峠にて生れた子供に産湯をつかわせたところからきているという伝説がある。

秋田県　「生はげ」　　（秋田県　男鹿市）

「生はげ」というのは，旧暦正月十五日の夜に，秋田県男鹿地方で行われる民俗行事である。すなわち，鬼面をかぶり蓑をつけ，木製の刃物と桶をもちおそろしい形をした夫婦鬼，あるいは子つれ鬼が，奇声をあげて農家にやってくる。これらの生はげは，まず，最初に神棚に礼拝し，新年の祝言をのべる。そのあと，「泣く子はいないか，怠け嫁，怠け婿はいないか……」といいながら，土足で家の奥に入ってくる。家の方では，山の神の使いとして，これを迎える。つまり，家の中の悪魔を払いのけ，家を幸わせにするものとして歓迎する。とくに，子供のわがままをこらしめるよい鬼として，今日までうけつがれている。親はそのさい，子供のかわりに鬼に謝ってやる。又，生はげの来た家は，悪魔の退散と新年の豊作祈願を満す山の神の使いとして，鬼に対し若干の酒や食物を供応して，帰ってもらうことになっている。

要するに，節分にやってくる生はげは，悪鬼を追払と共に，春を呼ぶ山の神の使い（善鬼）として，農家にやってくる。したがって，生はげに対しては，豆をまいて追払うことはしない。逆に若干の饗応をして帰ってもらうことになっている。

この行事で問題になるのは，そのような鬼（生はげ）のルートである。この点についても，い

ろいろの説がある。例えば，男鹿半島の山の中に住んでいた行者達（修験道）が，里にきて厄払いを行い，春を呼ぶ祝言をのべることからきていると説くものがある。また一説には，男鹿半島に上陸した渡来系の人々が，年一回，里にやってきて，地元住民と交流したことによるともいわれる。

いずれにしても，生はげの人たちの姿形や服装は特異である。つまり，平地の農耕民とは異文化関係にあることから，鬼といわれたことはまちがいない。なお，生はげは「なもみ剝げ」から来ているといわれる。「なもみ」とは，顔を火傷して水ぶくれした病的状態である。異文化の人の顔をこのようなものと表現したのかもしれない。

秋田県　鬼ケ城　（秋田県　鹿角市）

秋田県の鬼ケ城1,366mは，鹿角市（カズノシ）の南端で田沢湖町との境にあって，焼山の火口から流れ出した岩が洞窟になっている。この奇怪な地形を村人は鬼のいる城とみたのであろう。

なお，カズノというのはツノガ（角鹿）の反対で，頭にツノがある人ということで渡来人をさすことが多い。

秋田県　鬼壁山　（秋田県　角館町）

鬼壁山392mは，秋田から盛岡へ通ずる角館街道（カクノダテカイドウ国道46号）の途中にある比較的低い山である。昔ここに鬼が住んでいたが，坂上田村麿に退治された。そのカバネが鬼カベとなったという。鬼というのは先住民のことであろう。

山形県　鬼坂峠　（山形県　鶴岡市）

鬼坂峠は，山形県鶴岡市と温海町との境の峠で，国道345号が通っている。

この峠をめぐる昔話としては，越後の鬼が安部氏を助けようとして，この峠へやってきたところ，そこにたっていた地蔵にけとばされ，越後へ帰ったというのである。安部氏とは，平安中期エゾを統轄した安部頼時が源頼義に攻められたことをいうのではなかろうか。

福島県　安達原の鬼婆　（福島県　岩代町）

岩代町あるいは二本松市は福島市の南20kmの農山村である。

そこの安達原岩窟に，人の屍を食う鬼女（鬼婆）がいた。修験道がこの鬼女をのろい殺し鬼塚にほうむったという伝説がある。その鬼婆というのは「おばすて」に捨てられた老女かもしれない。

福島県　鬼面山（福島県　福島市　猪苗代町）

鬼面山（キメンザン）1,482mは，福島市の西部にある。福島市からみて山の形が鬼の顔に似ているからだとか（オニヅラヤマ），修験道の山であるからといわれる。山頂にはホコラもある。

福島県　鬼面山　（福島県　長沼町・天栄村）

長沼町は白河市の北20kmにある農村。

鬼面山1,021mの頂上付近まで現在も採石が行われ，崖になっており，鬼の顔をしているといわれる。

茨城県　鬼越山　（茨城県　石岡市）

石岡市は筑波山の東側にあって霞ケ浦に面した台地で，石器時代や古墳時代の遺跡も多く砂鉄もとれた。江戸時代には府中城（茨城石岡城）がつくられ，現在の県名のもとをなした。なお，明治になって，まちの名は府中から石岡に変わった。

鬼越山は200m以下の低い山であるが，岩穴があるため，鬼の住んだ山だと伝えられている。又砂鉄を原料とした製鉄との関係もあったのではなかろうか。

茨城県　マダラ鬼神　（茨城県　大和村）

大和村（ヤマトムラ）は，筑波山塊の北へ伸びたところの村であり，縄文土器や石器なども出土する。村の南部の加波山709mは，花崗岩を産出し，墓石や建材に加工されている。

楽法寺（真言宗）に関する昔話として，この寺が室町時代（14世紀の頃）に焼けたとき，マ

ダラ鬼が馬に乗ってあらわれ山中の鬼を動員して，木や石を運ばせ，七日間で寺を再建した。最後の日に，鬼を火祭に参加させ，鬼太鼓をうち，鬼踊りをさせた。

さて，この話の中に出てくる鬼というのは，おそらく，地元の檀家や職人たちが総力を出して寺を再建させたことを表現したのではなかろうか。

なお楽法寺の観音は，雨乞を行ったので雨引山楽法寺という。

茨城県　鬼ケ窪（クボ）　（茨城県　筑波市）

筑波市は筑波山の南の学園都市である。

鬼ケ窪の由来については，明らかでないが，旧谷田部村のオクにある凹地から，オニに変わったともいわれている。しかし，渡来人などとの関係もあるのではなかろうか。

栃木県　鬼怒川　（栃木県　藤原町）

鬼怒川は，福島県と栃木県の境の鬼怒沼山2142mから東へ流れ，やがて南下し利根川本流に達する延長170kmの，長い河川である。鬼怒川の支流には，大谷川（日光），男鹿川（川治）などがある。この川は奥日光の山間をぬって巨岩の間を蛇行し滝と急流をくりかえし，竜王峡や鬼怒川邪馬渓をつくるところから，鬼の名がついたのである。なお，鬼怒はアイヌ語の川という意味である。

群馬県　鬼石町　（群馬県　鬼石町）

鬼石町は群馬県の西南部の山村で，有名な三波石（サンパイシ）を産出する。三波石（変成岩）は，緑泥片岩で，庭石としても利用されている。

鬼石町の由来については，この町の西の地域にある御荷鉾山（ミカホコヤマ）1,246mは，古生層の山で，杉桧が鬱蒼と茂り，青石や水銀鉱を生産すると共に，昔，そこに鬼が住み，山の石を下に落とし住民を苦しめた。そこで弘法大師がこの鬼を調伏し，鬼の持っていた石棒をとりあげた。それが三波石であるという。

群馬県　鬼岩　（群馬県　嬬恋村）

嬬恋（ツマゴイ）村は，群馬県の西北の高原地帯にある。

鬼岩は，村の西部の長野県との境の吾妻山2,333mの下にある。幅50m，高さ20mの大岩があるため鬼岩の名がつく。なお，吾妻山は山岳信仰の山である。

千葉県　鬼ケ瀬　（千葉県　白浜町）

白浜町は房総半島の南端にある漁村であり，「白羽真」（シラハマ）といわれた（和歌山県の白浜の漁民が漂着したところとも言われている）。千葉県白浜町にあるこの浅瀬は，海が静かな時は，暗礁（鬼）にあまり波がたたないため，かえって，わかりにくく航海のさい注意が必要であるとされている。

千葉県　鬼ケ崎　（千葉県　鋸南町）

鋸南町（キョナンマチ）は館山市より北20kmのところにあって，浦賀街道に面している。鬼ケ崎の地名は海岸に岩場があるためである。

東京都　羅生門　河岸の鬼　（東京都）

羅生門河岸というのは，江戸の新吉原東側の，お歯黒どぶ（オハグロ）に沿うところで，庶民的な遊び場（遊女もいた）である。この新吉原では，通行の客を無理やりに座敷にひっぱりあげるというポンビキ（客引）がいた。そこで，源頼光の臣，渡辺綱がこの悪人間（鬼）を退治したという故事がある。（平安中期の頃の話）

東京都　鬼ケ島　（東京都　青ケ島村）

青ケ島は，伊豆諸島の中の八丈島より，さらに南にある孤島で，都心より約400km離れた太平洋上にあり，周囲8kmほどの火山島である。もとは鬼ケ島あるいは葦島（アシジマ）といっていたのを，ソフトな形の青ケ島に改めた。いずれにせよ，へき地であり孤島であることには変わりない。

東京都　鬼窪（クボ）　（東京都　内）

杉並区の荻窪が，この鬼窪と関係がないので

はなかろうかと区役所に聞いたが違うという。オギクボは荻が生れてきたからだという。鬼窪は一体どこだろうか。

神奈川県　鬼柳　　（神奈川県　小田原市）

小田原市は，神奈川県の南部にあって箱根登山の入り口にある。

鬼柳という地名は，大きな柳の木があったためといわれる。

新潟県　鬼舞（キブ）　　（新潟県　能生町）

能生町（ノウマチ）は，糸魚川市の北側の日本海沿のまちである。

この地区には女神を祭っている五霊神社がある。その神社で女神と鬼とが戦って鬼が勝った。そして，鬼が喜んで舞ったことから，鬼舞（キブ）の名がついたとの話がある。

新潟県　鬼木　　（新潟県　栄町）

栄町は三条市のすぐ南の農村である。

鬼木地区は鬼木新田が開拓された村である。おそらく，その地域には鬼木(大木)などが残っていたのではなかろうか。

新潟県　鬼ケ面山
（新潟県　入広瀬村・福島県　只見町）

入広瀬村は，福島県只見町と接する山村である。

鬼ケ面山1,465mはけわしい山である。

富山県　鬼岳　　（富山県　立山町）

立山町は，稱名川流域から黒部湖を含んだ中部山岳地帯に属す。

鬼岳2,750m（餓鬼岳）は，雄山の南にあって角のように尖った峯があるためとか，あるいは修験道場の一つであるため，鬼の名がついたといわれる。

石川県　鬼屋　　（石川県　門前町）

門前町は，元総持寺のあったところである。

総持寺は最初は真言宗であり修験者がいたといわれる。

鬼屋は鬼谷（オニヤ）であり，総持寺への道筋にある。萩の密生した土地であったため，萩屋（オギヤ）といったのが，鬼屋（オニヤ）になったともいわれる。あるいは，渡来人が漂着したところかもしれない。

石川県　鬼の寝尾島　　（石川県　輪島市）

輪島市は能登半島の最北端のまちであると共に，さらに北の孤島をも含んでいる。

鬼の寝尾島（ネオジマ）というのは，輪島市の市街から，さらに北へ25kmの日本海上に浮かぶ孤島である（夏のアワビ採りで有名な舳倉島と輪島市との中間のところ)。鬼の寝屋島（ネヤジマ）という名がついたのは，周囲1km程度の大島，竜島，烏帽子などの小島(標高50m以下)が，無気味に日本海の中に散在しているためである。輪島の海人は舳倉島のみならずこの島においても，アワビとりを行っている。

なお，輪島という地名は，古くから，この地方へ来た渡来人が，日本人を倭（ワ）といったところから来ているといわれる。

福井県　敦賀の地名　　（福井県　敦賀市）

ツルガの地名は，任那の国（ミマナ）の角鹿（ツノガ）が，この地に来て大和朝廷に仕えたという。「ツノガ」は頭に鹿のようなツノのある人ということで，渡来人をそのように見たのであろう（毎日新聞『新版日本の道』)。出雲から山陰海岸にかけては，古くから朝鮮からの渡来人が多く，瀬戸内海と共にこの地方は，古代文明の先進地である。

福井県　鬼ケ岳　　（福井県　武生市）

鬼ケ岳533mは，武生市の西にある。この山を別名，丹生岳（ニウダケ）というのは，水銀が出たからである。又，武生市一帯は，丹生郡の名がつけられていることからも，この地帯は鉱山としての関係は深い（若尾説)。

福井県　遠敷神社　　（福井県　小浜市）

遠敷は，昔は，小丹生（オニュウ）といった。丹生の名のつくのは水銀との関係であろう。鬼

との関係はないという人もあるが，水銀と鬼との関係は深いとおもう。

山梨県　鬼の湯　　（山梨県　甲府市）

甲府市湯村には，その名の通り温泉が湧き出ているが，鬼の湯は天狗がこの温泉に入ったといわれる。

山梨県　鬼ケ岳（山梨県　足和田村・芦川村）

足和田村は富士五湖の中の西湖のある村である。この村の北側は御坂山地で，そこに鬼ケ岳1,738mがあり，その北に芦川村がある。

長野県　鬼押出し　　（群馬県　嬬恋村）

嬬恋村（ツマゴイムラ）は県の西北端に位置し，浅間山などに囲まれた高原地帯である。村の名はヤマトタケルが東征のさい，亡妻オトタチバナヒメを恋偲び，「吾嬬者那」（アズマハヤ）とよんだという故事による。

長野県の浅間山（活火山，2,500m）は，天明3年（1783年）に大噴火をおこしたが，そのときの熔岩流が北斜面に流れ出し，地元集落を襲って，約二千人の死者を出すとともに，そのあとに熔岩流のかたまった荒々しい岩肌を作り出したので，それを人々は鬼の仕業とみた。つまり，地質学的には熔岩流が冷却したとき，あのようなゴワゴワした岩膚の塊となったのであるが，昔の人は，その偉大な自然力を表現する場合，怪力の鬼がこのような岩を作りだしたと考えた。

長野県　鬼面山
（長野県　喬木村・豊丘村・大鹿村）

喬木村（タカギムラ）は天龍川の左岸（飯田市の東）の山村で，南アルプスの連山と天龍川の河岸段丘とよりなっている。喬木村の東の尾根に，鬼面山（キメンザン）1,889mというけわしい山がある。中央構造線によって形成された山である。

長野県　鬼無里村の紅葉（長野県　鬼無里村）

鬼無里村（キナサムラ）は，長野県の北部の戸隠連山の中にあって，標高1,000m以上の高山がそびえている。

鬼無里村の鬼といわれた紅葉は，平安末期（十二世紀）の官女で，源経基と不義の恋をしたというので，信州の戸隠村と鬼無里村との境の新倉山に流され，そこの岩屋にすんだ。紅葉は女であっても，盗賊の頭として近郷を荒し，又，旅人をおそったという（実は，地域の首領）。

そこで，平維茂（タイラコレモチ）は，紅葉という名の鬼退治を行ったというのが，この話の筋である。なお，紅葉が退治されると，この地方は平和となったので，鬼無里（キナサ）と呼ばれるようになったとのことである。

長野県　白馬村の青鬼
（長野県　白馬村・鬼無里村）

長野県の北西部にある，白馬村と小谷村との境にある岩戸山1,356mには，神秘的な大きな洞穴がある。この地方の昔話として，この洞穴に，毛むくじゃらけの大男が住んでおり，それを青鬼と呼んだ。この大男（鬼）は，はじめからここに住んでいたのではなく，もとは山一つこえた鬼無里村にいた（戸隠地区の鬼無里村のこと）。しかし，そこを追出されたので，ここへやってきた。他方，戸隠の方の村は，前述の通り鬼がいなくなり鬼無里村になった。

長野県　鬼沢　　（長野県　山ノ内町）

山の内町は，湯田中温泉や志賀高原のある町である。

沢というのは，渓流や湿地帯であるから，鉄か鉱毒などが流れていたと思われる。

長野県　鬼ケ城山　　（長野県　喬木村）

喬木村（タカギ）は，飯田市の東側の山村である。

鬼ケ城山1,501mは頂上がとがっているため，そのように呼ばれたという。

岐阜県　鬼姫生　　（岐阜県　藤橋村）

藤橋村は揖斐川上流の村で，ここに横山ダムが戦後できた。ダムに水没した村に，昔，一人

の娘がいて男に恋をしたが，ふられたので，残念に思い小屋にこもった。そして執念で鬼になったという。（キニュウと読む）

岐阜県　鬼谷　（岐阜県　八幡町）

八幡町は長良川上流の郡上八幡のことをいう。吉田川との合流点より東5㎞のところに鬼谷がある。隠谷が，オニタニになったといわれる。

岐阜県　鬼岩温泉　（岐阜県　御嵩町）

御嵩町は美濃加茂市から東10㎞の農山村で，木曽川の支流の可児川沿である。渓流沿に奇岩，怪石があるため鬼岩の名がついたと思う。

静岡県　秋葉神社の火祭り（静岡県　春野町）

静岡県春野町秋葉山は，老杉の茂る深山で，標高860ｍと高い。そこには火之迦具土神（ヒノカグツチ）をまつり，山自体が御神体で，火防（ヒブセ）の神となっている。

秋葉神社は，もともと，秋葉寺と，神仏集合で役行者によって開かれ，修験道（山伏）による秋葉山・参尺坊・大権限がまつられ，僧侶，修験，禰宜の三者によって維持され，秋葉信仰の中心的存在であった。現在でも，京都の愛宕山と共に，雷神，天狗，火防の神（竈神）としてあがめられ，全国各地に秋葉講がつくられている。

旧11月16日，17日（現在，12月15・16日）の例祭には，秋葉の火まつりが行われる。そのさい，神官によって，弓の舞，剣の舞，火の舞が特設舞台で行われる。そのうち，火の舞は，夜11時頃，境内の火が消され，本殿の奥深く奉安されている万年の御神灯より火をうつした松明を持った神官が，寒風の中，松明を高く，あるいは低くふりかざし，又，時には激しく，あるいは優雅に円を描く。そのため，参詣者は寒さを忘れ，その神秘な火を見入る。

この神事が旧11月霜月に行われるということは，愛知県の設楽の火まつりと同じく，秋の豊作の感謝と春の豊作祈願を兼ねていると思う。又，11月の最も太陽の力の衰えたときに，その活力（火の幸）の再生を祈願しているものとみてよい。それと共に火難，水難，諸厄，諸病を祓いのけるためである（火難とは，悪火の防止と鎮火をいう）。なお，現在は，秋葉の火まつりは，神仏分離によって，秋葉神社と共に秋葉寺（主として山伏）の両方によって行われる（いずれも12月15日）。

静岡県　鬼岩寺　（静岡県　藤枝市）

藤枝市は安部川と大井川の中間の丘陵部にある。

鬼岩寺の裏山には，多くの穴のあいた大きな岩があって，そこには悪い鬼が住んでいた。又，それを弘法大師が退治したという話がある。

静岡県　鬼女新田　（静岡県　相良町）

相良町（サガラ）は，御前岬の北の農漁村である。

安閑親王の王子はわがままで，この土地に流された。たまたま，村の山地に鬼女が住んでいた（土地の支配者）。王子は村人の依頼を受けてこの鬼を退治した。それによって，その土地は鬼女新田と呼ばれるようになった。

愛知県　花祭り　（愛知県　東栄町）

国の無形文化財に指定されている奥三河の花まつり（霜月祭）は，愛知県北設楽郡東栄町を中心に，奥三河の17箇所ほどの村で，現在も行われている。花まつりといえば，本来は，春の収穫祈願祭であるが，この地方では，現在，秋の11月に，収穫感謝祭，春の豊作祈願祭，それに祖先供養祭をかねておこなわれている。したがって，この花まつりは「霜月まつり」ともいわれている。（なお，花まつりの言葉は平安中期（10世紀），花山天皇とも関係しているともいわれるが真偽は不明）。

祭りのやり方は，鬼の面をかぶった村人が神楽を舞う（霜月神楽という）。又，タイマツを赤々と燃やした鬼が堂内を走る。その目的は，鬼の霊力（神通力）によって，悪魔をとばし，天の神に豊作を祈るためである。したがって，この鬼は禍をもたらす悪鬼ではなく，福をもたらす

神通力をもった善鬼ということになる。あるいは，この鬼は，神の権現（ゴンゲン）あるいは眷属（ケンゾク）として，神の心を鎮め喜ばす機能を果たすことになる。なお，このような祭りのやり方は，修験道や念仏踊りに起源しているといわれる。

ところで，この地域の花まつりに，とくに鬼が脚光をあびて登場する根拠として，山の神の使いとしての鬼が，春になって山から里へおりてくると信じられた。又，鬼のもつ神秘的でエネルギッシュな動作の導入によって，祭りの演出効果の増大をはからんとしたが，それ以外に，次の点が注目される。奥三河地方は，地質学的にみて，中央構造線上に位置し，水銀などの有用な鉱物資源を産出したことによって，水銀（丹生）と関係の深い鬼が，祭りの主役として出てきたという点である。若尾五雄氏の『物質民俗学』の考え方によると，奥三河の花まつりは，アンチモニー鉱山などの豊かな資源を探しあてた修験者（山伏）などが，鬼の姿になって，喜び踊ることに起因しているとみる。又，愛知県の鳳来寺付近は，中央構造線上にあって，水銀などの鉱物を産したため，この地方の人々は，これらの資源に対して鬼が住むとみた。

湯立神事は，湯気に対する畏敬の念をあらわし，人間に付きまとう各種の悪魔や罪を取り除き，心の，もやもやを浄化するとか，季節の変わり目にさいしては，すがすがしい気分で新しい季節を迎えさせるなどの心理的効果が存在した。（招福除災を期待）。

愛知県　滝山寺の火祭　　（愛知県　岡崎市）

滝山寺は，古くからの禅宗寺院である。年始めの法会として，毎年1月1日から7日までの1週間，豊作祈願のため，修正会（シュジョウエ）が行われる。1月7日の結願の日の夜，白装束を着た12人衆，および祖父面，祖母面，孫面をかぶった3人の赤鬼が，大きな松明をもって，堂の外の廊下を廻る。松明をもった赤鬼たちは，悪魔ではなく，春の豊作をもたらす山の神の使者として，多くの参拝者から祝福をうける。鬼の服装は，上着は赤色，下着は紺色のズボンをはき，赤い脚絆をまとい，精悍な形をする。

12人衆は，白シャツとパンツだけで，鬼と共に松明を持って，寒風のなか，鬼と共に堂の廊下を廻る。

一般的に，火祭神事はきわめて神秘的であり，見物人に畏敬の念をもたらすといわれる。例えば，その心理的効果として，次のものがある。電気のなかった古い時代では，松明など燃えさかる火は，冬の夜空をてらす照明と採暖をかね，参拝者の大きな供応である。しかし，それ以外に，神仏への最大の神秘的な供え物となっていることは，いうまでもない。例えば，正月のかがり火は，神をまねき，盆のかがり火は，祖霊を呼ぶといわれてきたからである。とくに霜月の火祭のように，冬から春にかけての火祭は衰弱している冬（冬至）の太陽を，やがてさんさんと輝く春の太陽によみがえらせることを祈願して行われるとみてよい。したがって，又，来春の五穀豊作の前祝いともみられる。

とくに，この祭りをもりあげるために，火祭行事をとり入れられるのは，去る年の一切のわざわいをとり除き，又，越冬する田の害虫を焼き払ってくれることを期待する。つまり，火のお払いは，水や塩でのお払いよりも，一層強く，けがれや禍いの浄化作用をすると信じる。

又，年末の火祭は，自家の火を更新する。さらに，人間自身も松明の火の粉をかぶることによって，自分をとりまく厄が払われると信ずる。（但し，火祭に使われる火は，穢れた火では駄目で，新しく切り出した火，つまり，別火でなければならないとしている。）

ここで火の神（荒神）を祭る目的について要約しておこう。

第一は，火は聖神であり，恵みの神である。したがって，それに感謝する。第二は，火災予防を心掛け，又，神が不慮の災難を守ってくれることを期待する。

火祭りの種類としては，①精霊の迎え火や送り火。②悪魔払い（修正会や修二会など）。③招福除災。雨乞い。火の用心。④冬の太陽に活力を与え，春を甦生させる。

各地の火祭り行事としては次のものがある。1月には，左義長，修正会など。2月には那智の火祭り。8月には精霊の送り火（京都五山など)。11月には，霜月祭(北設楽，秋葉神社など)。

愛知県　津島神社の参候祭（愛知県　設楽町）

同じく愛知県北設楽郡の霜月祭りであっても，設楽町津島神社の参候祭の場合は，鬼は出てこない。その代わりに恵比寿，大黒天，毘沙門天，弁財天，布袋などの七福神（神人）が主役となって，夜の神事をすすめる。すなわち，社前で篝火（カガリ）を燃やし，又，神前にしめ縄を張り，釜に煮えたぎった湯をわかしたのち，神社の神人がその湯を参拝者にふりかける（湯立神事)。集まった村人たちは，その湯気をかぶると，風邪をひかないと信じる。又，湯気にのって田の神が，冬の農閑期の間，山へ帰ると見た。つまり，この神社の霜月祭は，春から秋までの農繁期に農耕を守ってくれた田の神を，山へ送りかえす(神に休養してもらう)。それと共に，その年の収穫の感謝祭として，おこなわれたといってよい。なお，この村では，祭りのもりあがりを，鬼の神通力によってではなく，神人の湯立神事の中で行うのが特徴といえる。

湯立（ユタテ）は，右にものべたように，神前に大釜をすえ，薪を燃やして湯気（湯花）をたて，巫女や神職などが笹を熱湯にしたし，呪文（託宣）をのべ，神を勧請し，その湯気を参拝者などにふりかけることによって，禊（みそぎ)，つまり，清め祓いの役目をせんとした(禊ミソギによって，病よけや田の虫よけをねがう)。又，神前に湯気をたちこめることは，神職や巫女たちを，神がかりの状態にさせる神秘的効果があることは，いうまでもない。湯立神事は，東栄町の花まつりや，岡山の吉備津神社の釜鳴り神事などで行われているのが有名である。

愛知県　鬼沢　（愛知県　額田町）

額田町（ヌカタ）は，蒲郡市の北10kmの山村である。

なぜ鬼沢の名がついたかは，役場でも不明であるが，折沢（オリザワ）がなまったのではないかといわれる。鉱毒が流れてきた跡もないといわれる。

三重県　鬼ケ城　（三重県　熊野市）

熊野市（旧木の本）から尾鷲市にかけての熊野灘一帯のリヤス式海岸は，大台ケ原から南へのびた紀伊山地が，太平洋へと突出することによって生じた。

鬼ケ城は，熊野市の海岸沿いにある約1kmにわたる奇怪な洞窟群をいう。この洞窟は，石英粗面岩の岸壁が，太平洋の荒波の侵食と数度の大地震によって生じたもので，その後，海岸が隆起して，現在のような大洞窟となったものである（天然記念物)。

洞窟の中で大きいのは，通称「鬼の岩屋」といわれているもので，高さ約15m，広さ1,500m²（50坪）で，天井が前へ張り出している。昔ここに多蛾丸（タガマル）という海賊がいて，住民を苦しめたので，坂上田村麿がこれを征伐したという昔話があり，近くに，「鬼の見張」という岩場もある。要するに，地元の人々は，その奇妙な洞窟をつくったのは，怪力の鬼であるとか，あるいは，そこに鬼がすんでいたのではないかと考えたのである。

三重県　九鬼氏　（三重県　尾鷲市）

尾鷲市は尾鷲港という良港をもち，漁業基地であると共に，紀州より伊勢志摩へ海上ルートの要衝の地である。そこには熊野水軍が根拠地をかまえ，その首領は，鬼の名のつく九鬼氏であった。九鬼氏は，九木崎（九鬼岬）から伊勢志摩にかけての七島の徒党を追討し，秀吉に仕えて，三万石を領したというが，ともかく，おそれられた存在といってよい。

なお，熊野速玉神社の宮司も，九鬼氏の名がある。

三重県　八鬼山　（三重県　尾鷲市）

八鬼山（ヤキヤマ）628mは，尾鷲市の九鬼集落の北側の山である。国道311号のバイパスとし

て，従来の海岸沿のつづら折りの道路を八鬼山ルートへと切り替えられつつある。尾鷲節に「ままになるなら，あの八鬼山を，鍬でならして通わせる」とある。

三重県　鈴鹿峠の鬼　　（三重県　関市）

鈴鹿峠（スズカトウゲ）といのうは，滋賀県土山村と，三重県関市との境界上にある旧東海道（国道１号線）の峠である。

この峠の上には，鏡石と呼ばれる１ｍほどの黒色の大きな石があり，峠神信仰（地主神）の対象となっていた。

ところが，伝説では，この峠に昔，東海道を通行する人々を襲う鬼女がいた。そこで村人は，奥州平定をめざす坂上田村麿がこの鬼を退治してもらった。それにより，この峠は安心して通れるようになったという伝説がある。

三重県　伊勢神宮の穢と忌（三重県　伊勢市）

仏教以外で，日本人の思想に大きく影響を与えた神道における「罪，穢，忌み」（ツミケガレ，イム）は，日本人の素朴な潔癖感と伝統的身分制から生じたものが多い。すなわち，不潔，不浄，不快な感情をおこすものとして，とくに，生老病死に関するものがある。例えば，①身体に対する穢れとして，死人，病人，血の穢れ（月経，出産，大小便など）。②食物の中の穢れとして，獣肉や五辛。③人間関係の中の穢れとして，犯罪者，外国人，賤民などがある（今日からみれば，いずれも非科学的思考）。

神道における祓（ハライ）とは，忌むものを空気で払って清浄することをいう。又，禊（ミソギ）というのは，水で汚れをおとすことをいう。

滋賀県　男鬼・鬼神木　　（滋賀県　彦根市）

彦根市は滋賀県北部の政治経済文化の中心地で，井伊氏の城下町である。

彦根市男鬼町（オオリ，チョウ）に，豪士の七左衛門の屋敷があった。その屋敷には，鬼神木（キシンギ）という大榎（エノキ）があったが，七左エ門がそれを伐ったため，そのたたりで熱を出して，死んだという話がある。

なぜ男鬼町という地名がついたかは不明である。榎の大木を神のやどっている木と考え，大切に保存せよという話は各地にある。

滋賀県　伊吹山の鬼
（滋賀県　伊吹町・岐阜県　春日村）

伊吹山1,377ｍは，滋賀県と岐阜県の境にあって，高山植物や薬草の豊庫でもある。

この地域には縄文遺跡が多く，又，クマソやエゾを征伐したヤマトタケルがこの山の荒神（アラガミ）を征伐されたとの話もある。又，山岳宗教も多く残っている。

大江山と地形式にやや似た伊吹山に，伊吹童子という鬼がいて，暴行をふるまった。そこで，源頼光がこれを退治したという伝説がある。

鬼がある地域を支配したとか，山から下りてきて里を荒したという昔話は，単なる縄張り争いをいうのか，あるいは資源の独占支配に対する攻撃を鬼退治にかこつけて行わんとしたのか，真相の解釈はむつかしい。

滋賀県　逢阪山の鬼
（滋賀県　大津市・京都市）

逢阪山（オオサカヤマ）は，京都の山科から滋賀県の大津へ越える旧東海道（国道１号線）の峠である。（標高150ｍ）昔，この峠に通行人を襲った盗賊（鬼）がいたが，武士によって退治される。

京都府　羅城門の鬼　　（京都府　京都市）

京都市九条の羅生門（ラショウモン）は，平安京の南に位置する正門である。そこに鬼神がすみ，夜になると，各種の悪事を働いた。

そこで，渡辺綱がその鬼の腕を切りおとした。これが観世流の能に脚色された「羅生門」である。なお渡辺綱は平安中期の実在の武人（953～1025）。摂津の渡辺に住み，律令国家の衰退後の平安末期のころ，各地に発生した豪族，例えば，酒呑童子退治物語などの主役となって活躍した人物。

京都府　愛宕山の鬼　（京都府　京都市）

愛宕山（アタゴヤマ）891mは，京都市の北西部にあって，山頂に愛宕神社があり，雷神を祭り，防災の守護神である。ここに人を食う鬼女がいた。伝説によると，渡辺綱は持っていた髪切丸という名刀で，この鬼の片腕を切りおとしたという。

京都府　老ノ坂の鬼　（京都府　京都市）

老ノ坂というのは，京都市の西の亀岡市との境（国道9号沿）にある峠である。源頼光による大江山の酒呑童子の鬼退治伝説の原型となった（昔，丹波のオオエヤマといわれたのは，このオイノサカである）。すなわち，老の坂にすむ鬼が京都のまちに来て，暴れまわったので，頼光に頼んで，これを退治させたというのである。

京都府　一寸法師と鬼　（京都府　京都市）

室町時代のお伽話に「一寸法師」という小人（コビト）がいて，その出世話として，次のようなものがある。大阪に住む夫婦が，願をかけて生まれた豆粒のように小さい一寸法師は，淀川をさかのぼり，京都の大山崎町の宝積寺で修業したのち，京の都にのぼり鬼退治をした。一寸法師は，鬼の宝である打出の小槌をふると，背が伸び，一人前の若者となる。又，鬼退治という難事業をなしとげたので出世し，しあわせな家庭をもつことができたというのが，この話の筋である。

京都府　東寺の修正会　（京都府　京都市）

東寺（教王護国寺）は，弘法さんといわれるように空海によって，平安京鎮護の寺として建てられた。修正会の正は，正月のはじめに，旧年の悪（鬼）を払い，新年の平安を願う仏教行事である。

京都府　吉田神社の鬼遣い（京都府　京都市）

遣い（やらい）とは，追払うこと，京都大学の東側にある吉田山にある吉田神社では，二月三日の節分祭には，鬼の追儺行事が行われる。

京都府　上醍醐寺の鬼子母神
（京都府　京都市）

鬼子母神（きしぼじん）といのうは，鬼子母を神格化した神をいう。鬼神王パーンチカの妻である鬼子母（きしも）は，釈迦の伝説によると，王舎城の夜叉神(猛悪な鬼神)の一人であって，千人の子供を生んだが，同時に，王舎城の町の子供を次々と奪って食い殺すという悪事をした。そこで，佛はその悪行を戒め，改心させるため，末子を隠した。その結果，鬼子母も，その後は，改心しインドの母神となったというのである。

さて，民衆が鬼子母神を祭るのは，このように，千人もの子供を生み育てるほどのエネルギーをもつ鬼の神通力（魔力）によって，安産や育児を妨げる悪魔を退散させ，母子の幸せを達成できると信じたからである。そのため，鬼子母神には，悪魔的な鬼形と，神通力をもった母神的天女型との二側面がある。日蓮宗の守護神は前者をとっている。又，西国三十三番観音霊場のなかの上醍醐寺（第十一番札所）では，その本尊として鬼子母神を祭っている。

なお，鬼子母神を祭っている寺や家では，節分の日に鬼払いをしない。

京都府　八瀬童子　（京都府　京都市）

洛北の八瀬には，鬼の住んでいたという岩窟があり，又，古くから修験道と関係した人がいたため，鬼の子孫が住んでいると伝えられている。八瀬の人々は，大原と共に，京都から若狭へと通ずる若狭街道沿（現在の国道367号）に住み，八瀬童子といって，天皇家の重要な儀式に長年奉仕し(駕輿丁)，その代わり課税を免除された。そのようなこととも関連して，八瀬を鬼の子孫のむら，と呼ぶ人もいる。

京都府　人鬼婆　（京都府　園部町）

園部町は京都市と福知山とのほぼ中間の城下町である。園部町の野々口集落に，160才をこしても，なお，元気な人鬼婆（ジンキババ）がいた。その姿形は鬼のような醜態であったという昔話がある。その婆さんが160才まで生きながら

えたのは，夜間，家を出て犬や人の骨をとってきて食べたからだというのである。ともかく，その無慈悲性とおそろしい姿形から鬼という名がつけられた。

京都府　三岳山，鬼原村（京都府　福知山市）

三岳山（ミタケヤマ）839mは，福知山市の北西の旧鬼原村にある。この山は銅鉱を産する山で，山頂には，修験道の主尊である蔵王権限と金山神が祭られている。

なお，この鉱山の坑口の間府（マフ）は，福知山市の上佐々木にある。源頼光が大江山へ鬼征伐にいく前に，この山に登り，大江山政略の作戦をたてたというので「見立て山」ともいわれている。

京都府　鬼住峠　　（京都府　綾部市）

綾部市の東部の谷筋の五津合町（旧中上林村）から，舞鶴へ通ずる峠を鬼住峠といった。綾部から東舞鶴へ通ずるこの道路は，綾部から西舞鶴に通ずる国道27号と共に，福知山盆地と日本海とを結ぶ重要な交通ルートである。

峠の鬼住といったのは，盗賊をさすのか，あるいは先住民をさすのかは不明である。

京都府　大江山の鬼　　（京都府　大江町）

酒呑童子の話は後にのべるとして，まず，大江町の概況をのべると，この町は由良川の下流に広がる段丘地帯であると共に山林資源や鉱物資源の豊庫でもある。そこには，最近まで河守銅山なども存在した。

鬼退治伝説の対象となった酒呑童子は，そのような資源の支配者でもあったとみてよい。他方，鬼退治というのは，実は，これらの鉱物資源を奪取せんとする行為であって，源頼光は，山伏を装い，酒呑童子に酒を飲ませて，これを実行したといわれている。絵巻の歌舞伎などにも，それが支配者の立場で脚色されて出てくる。ともあれ，鬼退治という名のもとに，鉱物資源の略奪戦がこのような昔話をつくったと筆者はおもう。

ところで，大江山と言えば，源頼光が四天王と共に大江山（オオエヤマ）の鬼退治をしたという昔話はあまりにも有名である。そのオオエヤマはどこかについては，京都市の老の坂でもあるといわれているし，又，丹後の大江山であるとも言われている（筆者はここでは後者とみる）。大江町は福知山から宮津への重要な交通ルートであると共に，大江山という鉱山がある。この丹後国大江山に，平安後期（11世紀）のころ，比叡童子の分派といわれる酒呑童子（シュッテンドウジ）が住んでおり，下流の農家をおそったり，婦女子を略奪するなど，山賊的行為を働いていた（酒呑童子は一時，近江国の伊吹山にも一時住んでいたともいわれる。なお，童子というのは，山伏に仕える従者）。そこで，源頼光は勅命により，この鬼を退治したというのが昔話の筋である。

なお，大江山は，千丈ケ岳といわれるように標高が800m以上と高いだけでなく，山頂付近には，酒呑童子が住んでいたという岩窟があり，又，鬼ケ嶽稲荷神社とか，元伊勢神宮などがあり，この地域は神秘的な森林地帯でおおわれ，古代遺跡も多い（渡来系の人々の居住地として）。

鬼退治といえば，源頼光による武勇伝が世間で最もよく知られている。その背景について，室町時代は足利氏の世であるから，足利氏は自分たちの先祖である源頼光の武勇伝を世に広めんとした。ここに頼光の鬼退治が有名になった理由があると。したがって，鬼退治の対象地域はどこでもよいと『鬼の地名辞典』に解説されているのは興味深い。

なお，鬼退治に名を借りた大江山侵略の目的は，この地域に産する鉱物資源の略奪をはからんとしたと筆者は考える。

京都府　鬼ケ城・鬼の岩窟（京都府　大江町）

大江町の鬼伝説は，北部の大江山など山岳部が中心であるが，ここでとりあげる鬼ケ城544mは，町の南部の福知山市との境にある山である。

この山には「鬼の岩窟」という洞窟がある。その大きさは，高さが3mで，横幅2mほどのものである。この穴は，昔，この地帯に，鉄，

銅，銀などを産出する鉱脈があったので，その採掘が行われた坑道ではないかといわれている。

京都府　千原　（京都府　大江町）

千原（チハラ）は血原のことで，大江町の西部の丘陵地が，上流の山からの鉄の赤錆で川に赤い水が流れていることから，このような地名ができたと思われる。

京都府　鬼の岩屋　（京都府　加悦町）

加悦町（カヤ）は，大江山の西の農山村である。ここに鬼の岩屋といわれる奥行20mぐらいの洞窟がある。先住民が住んだ所とか，坑道のあととかを裏付ける証拠はないと町の方ではいっているが，その可能性も多いのではなかろうか。

京都府　立岩　（京都府　丹後町）

立石（タテユワ）あるいは鬼岩は，竹野川の河口の海中にある奇岩である。この岩は花崗岩の基盤のうえにのった安山岩に，柱状節理が発達し，それが日本海の荒波で浸蝕され，材木をつみ重ねたような形状をしている。

伝説によると，頼光は，大江山の鬼を退治して，海に投げ入れ，天から落ちてきた岩で押さえつけたことによって，この岩ができたといわれる。あるいは，海からこの浜にやってきた鬼に，天から岩が落ちて，押さえつけたともいわれる。

ともあれ，冬になると，日本海から吹きすさぶ烈風がこの岩に当たり，ビューンという笛のような奇怪な音を出すので，地元の人は，鬼の号泣だとか，「もがり笛」とかいってよい。

ここで鬼が海上からやってきたというのは，おそらく渡来系の人をさすのではなかろうか。

京都府　経ケ岬　（京都府　丹後町）

経ケ岬（キョウガサキ）は，丹後町の東北端にあって，日本海をゆききする船の難所でもある(現在，燈台がある)。さて，この岬は竜(鬼)の仕業によってつくられたものと古くからいわれ，海難を防ぐために文殊菩薩が経文をこの地に修めたというので「経ケ岬」がつけられたという伝説がある。

京都府　鬼神塚　（京都府　丹後町）

丹後町は，京都府の丹後半島の北端にあって，漁業，鉱業が盛んであり，古くから朝鮮半島との経済的文化的交流が行われていた。丹後町の宮には，5世紀につくられた神明山古墳（全長182m，高さ27m前方後円墳)があり，その傍に，鬼神塚（キシンヅカ）という石碑がたっている。ここで鬼というのは，大陸系の先住民をいい，この鬼は，麻呂子（マロコ）親王によって殺されたが，それを祭ったのが鬼神塚であるといわれる。

京都府　北野天満宮　（京都府　京都市）

佛教では，生前よいことをした人や，すなおな人間の魂は，容易に他界できるが，そうでない者（無縁仏や餓鬼など）は，幽霊となって，家族や地域の人に祟（たたり）をおこすから，そのような不憫な人をねんごろに供養して，その霊魂を静める必要があるとした。例えば，盆には，寺で施餓鬼（セガキ）を行うとか，亡霊をなぐさめる盆踊りなどを行う必要があるとした（いわゆる，御霊会とか，御霊信仰といわれるものである)。

御霊信仰の中で最も代表的なものは，道真を祭る天神信仰である。平安前期（9C）の学者であり，高級官吏であった菅原道真は，晩年，藤原時平の中傷により太宰府に左遷され，いわゆる配所の月をながめながら，不満の死をとげた。たまたま，京都のまちには，災難や悪疫がつづいたので，道真の怨霊が鬼（雷鬼）となって清涼殿におちたのだとか，悪疫を蔓延させたのだとの噂が広がった。その結果，京都の町衆は，道真の御霊を天神として祭り，その御霊を鎮めることになった。したがって，道真に対する信仰は，人神信仰と共に天神信仰という二重性格をもった。

天神は，もともと，天の神(あまつかみ)，高天原の神，天上の父神 sky god である。地祇(チ

ギ），つまり，天孫降臨以前から地方を治めた国つ神，母神に対するものである。しかし，中世以降は，天の神の信仰は道真の天神にすりかえられた。また，天神信仰では，その御利益として道真にあやからんとして，次のようなものがＰＲされた。

学問上達の神，文学の神，書道の神，渡唐天神（禅宗僧侶による神佛集合），農業の神（雷神，雨，農耕用の牛）など。

古代人は，雷は神鳴（かみなり）であると信じた。雷は，雷鳴，雷光（稲妻），雷雨，落雷など種々の形をとって人間に祝福を与えたが，同時に，雷鳴は，神（天神）の怒りの表現と考えた。例えば，中世の公卿たちは，落雷やそれによる火災は，道真の怨霊の仕業であると恐れた。その結果，怨霊をなぐさめる天神信仰が，京都を中心に全国に広がったといわれている。他方，古来からあった雷神に対する日本人の信仰は，道真をまつる天神信仰の増大によって衰退した。

大阪府　王仁（於爾鬼）　（大阪府　枚方市）

枚方市長尾（旧津田村，淀川の支流である穂谷川流域の山地）に，「博士王仁之墓」があり，大阪府史跡（但し，伝）となっている。王仁は５世紀頃（応神天皇の頃），朝鮮の百済から渡来し，論語10巻と千字文１巻をもたらしたと伝えられている。又，これら韓国系の人々は，須恵器の生産や製鉄方法を日本に伝えたといわれる（河内鋳物カワチイモノ，といわれるもの）。ここで筆者がいいたいのは，王仁とか，於爾とか，和爾（ワニ）とかいうのは，鬼（オニ）からなまったものであり，又，鬼とは，製鉄というような特異な生業の人々とか，風俗習慣のちがう外国人（帰化人）を，日本人がそのように呼称したと思われる。但し，枚方地方には製鉄関係の遺跡は少ない。しかし，須恵器生産との関係はあると推定される。

なお，枚方地方には，渡来系の人々として王仁氏以外に秦氏（ハタ）などがあり，百済寺（クダラジ）跡も存在する。秦氏は，織（ハタ），つまり，織物の生産にあたったとされている（当時は絹や蚕もなかったので，麻を材料とした織物だろうか）。又，枚方は，「平たい国」ということで，淀川と支流の天の川とのデルター地帯で，農耕の盛んなところであると共に，たえず水害に悩まされた。そこで枚方市駅前には，意賀美（オガミ）神社が鎮座する。タカオカミは，雨龍であって，雨や龍，つまり水神と関係している。なお，このような水神信仰の存在する神社としては，京都の貴船，奈良の丹生川上神社（ニュウカワカミ），大阪府の泉佐野や岸和田の意賀美神社がある。又，故事に出てくる龍と鬼とは紙一重の妖怪であることは，いうまでもない。

大阪府　鬼虎川遺跡　（大阪府　東大阪市）

このキトラガワ遺跡は，生駒山麓の近鉄線新石切駅の南側にあって，弥生時代の大規模農耕集落跡である。鬼という地名がついているのは，鉄鋳物を生産する渡来系技術集団がいたためである。又，虎というのも，朝鮮系の虎とも関係しているのではなかろうか。

なお，河内鋳物については定説はないが，たとい，鉄鉱石が近くに生産されなくとも，燃料が地元に十分確保されれば，岡山や出雲などの中国地方から鉄鋳物（一次製品）をもってきて，二次加工（冶金）することも十分に可能性が存在する。

大阪府　父鬼　（大阪府　和泉市）

和泉市には，オニ（鬼）という名のつく集落として，旧南横山村の父鬼，旧横山村の九鬼，旧南松尾村の春木川（母鬼）などがある。これらの奥地山村がなぜオニという名のつく地名となったのかという点については，人によって意見を異にする。筆者の考えとしては，これらの集落は，大阪府下でも奥地山村地帯であり，下流の人々とは多少生活慣習を異にし，又，Ｖ字谷の厳しい景観や赤茶けた岩肌の山や瀑布なども存在したため，下流の人々は，おおげさに表現してオニといったのではなかろうか（ここでの「父鬼」地区の解説については，筆者の地元集落であるため，やや詳論となった）。特に父鬼

の場合，和歌山との境にある鍋谷峠（800m）の入り口の村として，経済的にも政治的にも交通の要衝の地であると共に，修験道との関係も深かったと思われる（要するに複合的要因が存在した）。

これらの鬼という名のつく和泉市の山間部は，同じ鬼という名のつく集落であっても，裏日本とか島根県などの山間部にあるオニ伝説地帯とは異なり，鉱山関係などによる下流への公害タレ流しなどの問題も，比較的少なかったと思う。したがって又，下流の人々からオニとして恐れられることは一般的に少なかったといってよい。しかし，全然なかったというとそうでもなかろう。例えば，史実として一応解明されているが，この地方の山間部には1万年ぐらい以前に縄文人が住んでいた。他方，海岸部の集落には，渡来系の弥生人が，紀元前3世紀ぐらいから池上地方などで農耕をはじめた。これら両地域におけるその後の生産力の発展の格差をみると，後者の稲作農民の方が急テンポで進んだ。その結果，下流の人々は生産力のおくれた山間部を「おっかない」（原始的，あるいは，おそろしい）とみたのではなかろうか。又，このような奥地山村は，水田も少なく，わずかばかりの自給作物の生産以外は，山菜，川魚，鳥獣などに依存する採取生活を長年つづけてきた。中世から近世にかけては，それ以外に，炭焼きとか，林業労働（植林，伐採，製材，筏流し等）とか，飛脚とか，茶，梅，渋柿，紙漉（カミスキ）などの小商品生産と販売を進め，平野部との交流を進めた。しかしその生活様式は，従来山間部の風土にそって，その自然と人間との共生という形で行われ，平野部あるいは海岸部の人々と，やはり異なった。例えば，家の構造なども，カヤ葺とか，桧ハダ葺であり，イロリの生活も長い間つづけられた。

なお，父鬼集落に鬼の名のついた歴史的，社会的背景としては，後述の修験道などとも関連した集落であると思われる。和泉葛城山から鍋谷峠，経塚山，七越峠をへて岩湧山，金剛山へ通じる山々は，標高900m級の和泉山脈であるが，大阪湾沿いの低地に住む人々からは，高い雲の峯地帯であった。この尾根地帯には，奈良時代頃から，役行者（エンノギョウジャ）など修験道の人々の歩いた道であった。父鬼はこの和泉山脈の峯の一つである経塚山への入り口（根拠地）であった。この点は，河内長野の鬼住（現在の，神カ丘）についてもいえる。

ここで，峠の入り口にある村としての父鬼について再言すると，陸上交通の脈管ともいえる道路には，大きくわけて二つがある。すなわち，川上から川下へと川の流れにそって下る道（川丈道路（カワタケ））と，峯（峠，村境）をこえて隣の集落（異郷）へと通ずる山越の道とである。和泉市の父鬼は，槇尾川の最奥の村として，泉大津あるいは和泉市から和歌山県のかつらぎ町および粉河町へと通ずる父鬼街道（1993年以後は国道480号）の入り口の集落として重要な役割を果たした。すなわち，標高800mという厳しい鍋谷峠を越そうとする旅人や荷物運びの飛脚などは，通常この集落で宿をとったり，牛馬を休息させたり，腹ごしらえや荷継ぎの仕事をした。又，修験道の人々も前述のように，しばしば，この村にたちよった。

なお，全国的にみて，鬼伝説で有名な場所として，例えば，砂金とか砂鉄などの鉱山開発によって，土砂を下流に押し流すとか，銅，銀，水銀などの採掘に伴う鉱毒水の下流へのたれ流しをおこしたところも多い。但し，和泉の場合は，前述のような鉱毒問題は比較的少ないのであるが，断層による山くずれとか，昔は海底であったことから，赤茶けた酸化鉄の岩膚（露頭）であるとか，酸性（塩分）の比較的多い谷水を，下流に流しているところとか（いわゆる塩谷川（シオタニ）），炭酸泉の湧く鳥地獄なども近くに存在する。又，最近まで，この地方の領家花崗岩を山砂利として採取するハッポの音とか，河川の汚濁とか，ダンプ公害などもおこしているところもあった。

さてこれらの奥地山村集落の旧土地台帳をみると，例えば和泉市父鬼の場合，小字名として，カナヤマ，アカサカ，カネコマツ，シオユワ，フキ，フキタニ，イモダニ，などのついているところもあるため，鉄と関係した集落であると

の意見もあるが，充分な実証は未だえられていない。又，父鬼の場合，台風や大水害のとき，上流から土石流（鉄砲水）や木材などが下流に流れてくるので，中下流の人々は上流の山村部をおそろしいところと見たのかもしれない。

なお，通婚関係をみても，従来（戦前）は比較的，閉鎖的で下流部との交流が少なかったこと，又，山村民は力仕事をするため筋骨のたくましい人々が多いことと共に，子供たちは，昔は小さい時から，子守，水汲み，薪割りなどの家事労働などをするため，小柄な人が多いことなども，いわゆるマチの人からは，多少奇異に感じたのかもしれない。又，ナマリのある言語や，性質もやや粗野だというように偏見したのかもしれない。

鬼といわれるところは，全国的にみて，公害などを発生するおそろしい所といわれているが，同時に，銀，水銀などの貴重な鉱物資源の存在するところである。したがって鬼退治にかこつけて，そこを侵略することが権力者にとって大きな利益をもたらした。さて，父鬼の場合，その資源として，製鉄や鍛冶の原料となる木炭とか，番傘や火薬包装用に使われる柿澁とか，素材生産に必要な鉄工具（鎌，鋸）なども生産された(野鍛冶の成立)。又，全国的にみて鬼の住む地域といわれるところは，例えば大江山とか，長野県の戸隠のように，都から離れた，いわゆる「地方」であり，とくに奥地山村や孤島などが多く，異文化地帯である。又，異邦人が鬼とみなされた点として，例えば岡山県鬼城(キジョウ）の場合，朝鮮からの渡来人（カヤの人）が，製鉄（タタラ）という特異な仕事に従事していたから，このような名がついたと言われているが，父鬼については，このような鉄に関する鬼伝説は存在しない。

大阪府　別所の刀塚　　（大阪府　堺市）

別所というのは，旧美木多村の最も奥の村である（現堺市の南端の村，美木は三鬼か)。

下別所の法華寺に，源頼光（ライコウ）の刀塚がある（頼光は，藤原時代（10世紀）の武将で，酒呑童子を退治した人)。なぜ，ここに頼光の刀塚があるかといえば，泉州地方に鬼がいたので，頼光にその退治をたのんだとか，あるいはこの村から約8粁離れた和泉市の父鬼に住んでいる鬼が攻めてきたので，頼光にたのんで，父鬼へ押し返してもらったとか伝えられている。そのさい頼光が使った刀を，この寺に埋めたので，刀塚ができたというのである。

かつらぎ山系には，父鬼とか，鬼住（オニズミ）とかいうような修験道と関係のある鬼という名のついた集落があるが，とくに父鬼と美木多の別所との間に対立関係などの話はあまり聞かないから，話は妙である。

別所の頼光塚については，大正10年刊行の『大阪府符全志』に「頼光塚は，法華寺の西にあり，高さ15～6尺，広さ10坪余り，源頼光，宝刀塚と刻せる石碑立てり。伝説によれば，大江山の鬼とも称すべき悪徒，この地の山間に立篭り居りて，横暴を極め，在所困憊せしかば，頼光，その臣下を率い来りて，之を亡ぼし，その刀剣を埋めし所なり」と記されている。但し，現在は，そのような塚はなく，みかん畑になっている。そして広徳2年（1085）の銘のある「頼光奉剣塚」という碑がたっているが，おそらく徳川期に建てられたものであろう。」と思われる。

大阪府　鬼住　　（大阪府　河内長野市）

旧鬼住（オニズミ，現在は神カ丘）のある集落は，河内長野市の観心寺の近くの山村で，昔は炭焼などをしていた。ここの集落に鬼の名がついたのは，和泉市の父鬼の場合と同じく，かつらぎ山系の修験道と関係が深かったことからその名がついたのではなかろうか。

大阪府　雁多尾畑　　（大阪府　柏原市）

柏原市の雁多尾畑（カリンドオバタ）という集落は，大和川が大阪平野から大和平野へ入る右岸の丘陵上にある(生駒山地の南端)。柏原周辺は古代における大和への入り口にあって交通の要衝である。

この集落の名がむつかしい。雁林堂畑あるいは単に畑村ともいう。地名の由来として，生駒山地の南端部の上空を，雁の列がよく通ったこ

とから来ているともいわれる。この地区には山王権限（金山姫神社）がある。鬼子母神（キシボシン），金山彦（カナヤマヒコ），金山姫は，鉱山冶金（ヤキン）の神である。又，この地区では，古代における製鉄の跡としてカナクソも出る。

大阪府　桜井神社の雨乞踊　（大阪府　堺市）

桜井神社の旧上神谷村（ニワダニムラ）は，稲作の盛んなところであるが，瀬戸内海気候帯にあるため，数年に一回は干ばつに苦しめられた。そこで，貝塚市の蕎原地区などと同じく，この地区でも雨乞行事が盛んであった。雨乞踊りは，旱魃のさい，雨をふらせてくれるように，村人が雷神あるいは天にいる龍に雨降りの祈願する民間行事で古くから，日本の各地，とくに大きな河川のない瀬戸内海地方でさかんに行われた。また途上国やアジアの専制国家においても，ふるくから雨乞行事は行われて来た。さて，雨乞踊りのさい，その主役となる人物やその持物などは，全国の各地域によって異なっているが，例えば，堺の桜井神社（元は，鉢ヶ峯の国神社）の雨乞踊りでは，風流踊り的形式（フリュウオドリ）をとっている。天狗と共に，赤鬼，青鬼が出て，太鼓を打ち鳴らし，中踊りの主役となる。外踊りは菅笠をかぶった若者が，シメ太鼓と鉦をうちならしながら廻る。雨乞踊りに鬼が出てくるのは，雷神にくらべ，鬼の方が力が強いので，踊りに参加してもらうとか，旱魃を起こさせる悪神を祓うのに，鬼が力が強いので協力してもらいたいと，昔の人々は考えたのかもしれない。ともあれ，ここでの鬼は，修験道との関係が深く禍いをもたらす邪鬼ではなく，地域住民に協力する善玉的鬼である。

（注）風流踊り

民族芸能のなかの一つの型である。すなわち，風流踊りは，宮廷の神楽とか，舞楽とか，民間の口上ものとか，田楽とか，人形芸などとも異なり，次のような特色がある。

平安後期以降（10世紀頃より），全国各地における荘園，社寺，それに庶民意識の向上に伴って，厄神，死霊，怨霊などを鎮魂するため，鉦や太鼓などを打ちならしながら踊るもので，服装や出し物（傘，花，天狗，鬼など）にも工夫をこらし，念仏踊り，太鼓踊り，盆踊り，雨乞踊りなどの形で行われる。

大阪府　盂蘭盆会の盆踊り　（大阪府下）

ウラボンエは，祖霊が盆に里帰りするさい，古仏，新仏，無縁仏（餓鬼仏）等に供物をそなえ読経して，冥福を祈るものである。とくに，冥土に行けない怨霊を救うことが大きな願いである。

日本では四季の変化が大きく，生産も生活様式もそれぞれの季節によって変わる。例えば，正月は神祭，盆は仏祭りが行われ，又，生産活動も，春には稲，秋には麦作が中心となる。

念仏踊りというのは，旧暦７月盆に行われる踊りで，平安末期に空也や一遍などによって始められたもの。南無阿弥陀仏などの念仏をとなえると共に鉦などをならし，陽気に踊るものである。つまり，このような民間行事は，僧侶中心に，堂内で，わけのわからぬ経文を聞き，又，呪文を口先きだけで唱えるものではなく，在家信者が野外に出て，鉦をうちならし，体や手足を動かして活発に踊ることによって，怨霊のみならず，踊手自身が心身共に歓喜の状態（恍惚）となり，心の中の，もやもやを一気に払いのけんとするものである。盆踊りは，本来は，祖霊や死者の魂を鎮め，死者をすみやかに成仏させようとするねらいで始められた。しかし，家族や遺族の死者の霊に対する供養といっても，結局は，死者の名をかりて，遺族たちの心をしずめさすことを期待したと言ってよい。そのため，盆踊りは漸次，風流化，娯楽化，郷土芸能化していくことになった。

問題は，祖霊崇拝と自然崇拝（自然神話）との結び付きの関係である。私見としては，農耕民族としての日本人の場合，農業生産の基盤である土地は，一応世襲されるから，当然のことながら，祖霊崇拝が行われる。又，稲作農民の場合，労働力以外に農地，太陽，水（山），草木（肥料，燃料）など，自然エネルギーの依存率が高いため，そこに，自然崇拝がおこると共に，

祖霊崇拝と自然崇拝との結び付きも生じたと思われる。これは西欧の自然克服型文化と日本の自然順応生活との違いでもある。つまり，個人主義的で，人力への依存の高い西欧牧畜社会と，水利の共同化や共同作業と共に自然力依存の日本の伝統的稲作農耕との大きな相違とおもう。但し，畑作園芸の増大化や農業社会より工業社会・賃労働社会へと移行した日本の現在では，漸次，西欧的な個人主義・拝金主義へとはしりつつあるため，集落中心の盆踊りは後退ぎみである。

兵庫県　鬼神山古墳　　（兵庫県　神戸市）

鬼神山（キシンヤマ）古墳のある垂水区伊川谷は，神戸市の行政区域にはあるが，明石市の北東７㎞の丘陵部にある。この古墳は６世紀の円墳で，直径14ｍ，２個の木棺が埋められ，副葬品として，神獣鏡，鉄器，銅製品，馬具，須恵器が出土されている。

古代の日本人は，朝鮮系の人々を鬼といい，又，その首長の墓を「鬼神」といった。その一つの例としてこの古墳がある。

兵庫県　長田神社の節分祭（兵庫県　神戸市）

長田神社は，ＪＲ神戸駅西３㎞のところにある。この神社は国家鎮護と共に開運の神として信仰され，節分の追儺式は有名である。

鬼払いの場合，５つの鬼（太郎鬼，赤鬼，青鬼など）が，タイマツに火をつけ乱舞する。つまり，火の力によって悪魔を追放し，春の豊作を願うわけである（無形文化財指定）。

兵庫県　姫路總社の鬼石　（兵庫県　姫路市）

姫路市の射楯兵主神社（イタテヒョウス）は，五十猛命と大己貴命をまつる播磨国の總社で，そこには，大きさが50㎝くらいの霊石がある。この石は，節分の鬼遣らい（おにやらい）のとき，修験者が座した石とされ，一般人は腰をかけないことになっている。この石は神が降臨したときの石とか，大江山の酒呑童子が化けた石であるとかの伝記がある。

兵庫県　鬼の架橋　　（兵庫県　柏原市）

柏原町（カイバラ）は，福知山線沿の旧城下町であり，昔は鉱山もあった。町の南東に金山（カナヤマ）（標高500ｍ）があり，その山頂に畳三枚ぐらいの大岩がある。又，その岩と岩との間に，橋のようにまたがる岩があるので，鬼の架橋（カケハシ）の名がついた。要するに，ここでの鬼の名は，鉱山と関係があり，又，その奇妙な岩の形を鬼の仕業と考えたことによっている。

兵庫県　笹御霊神社　　（兵庫県　朝来町）

朝来町（アサゴ），多々良地区（タタラ）は，姫路市から約40㎞北上したところに位置し，その南の生野町（イクノ）は，金香瀬山（カナセ）などの鉱山地帯である（有名な生野鉱山）。多々良の地名は製鉄のタタラから来ているといわれる。

又，朝来町笹山にある御霊神社は，出雲原の神（興津彦（オキツヒコ）と興津姫）を祭っている。この山の中腹には，鬼が住んだという大きな岩があり，節分には，鬼祭りの行事も行われている。ここでの鬼は，鉱山関係の人々，あるいは渡来人をさしたとみてよい。

兵庫県　鬼神谷　　（兵庫県　竹野町）

竹野町は円山川と城崎町の西に位置し，但馬海岸沿にあって，古くから朝鮮との経済的・文化的流通が大きかった。

その中に鬼神谷（キシンダニ）という名称の集落ができたのは，渡来系の人々が主として住んでいたことと彼らが須恵器の生産と鉱物の採掘に当ったということである。その証拠として，須恵器の窯跡とその破片がみつかっている。

なお，江戸時代には，この地で金銀の採掘が行われたこととか，大正昭和時代には，久原鉱業，日本鉱業が銀を掘り出したことは，史実にも出ている。

なお，竹野町と東側の城崎町との境界には，「鋳物師房峠」という名称の山があることによっても，この地が古くからの鉄などの産地であることは証明される。

奈良県　鬼取山　　（奈良県　生駒町）

大阪と奈良とをつなぐ暗峠（クラガリトウゲ，現在国道308号）の東側の生駒市にある鬼取山に，かって，赤目（前鬼）と黄目（後鬼）という夫婦の鬼が住んでいた。この鬼は，峠の下の村におりてきて，旅人や村人や家畜などをしばしば奪った。そこで村人は，和泉山脈から金剛山地を支配した修験道の役小角（奈良時代の山伏）にたのんで，この鬼を退治してもらった。

たのまれた役小角は，鬼をこらしめる方法として，親子の鬼のうち，子鬼をかくした（現在流にいうと誘拐した）。そうすると，子がいなくなった親鬼は，非常にかなしみ，「今後はけっして村人などに悪いことをしないから，子供を返してほしい」と行者に願い出た。そこで役行者は，これを許すかわりに，村人の供養のために寺を建てさせ，又，鬼の髪の毛を切り，境内に埋めさせた。その寺が髪切山慈光寺である。なお，役行者は，その後，生駒の鬼をつれて，吉野へ向かったと伝説はのべている。

なお，生駒山は，かつらぎ修験道の終点であり，又，この山は片麻岩でチタン鉄が出るともいわれるから，ここでの鬼というのも，その資源の所有者であったのかもしれない。

奈良県　吉野山修験道　　（奈良県　吉野町）

吉野町は紀の川（吉野川）の上流にあり，又，大峯山脈の北端にあって，経済的社会的に重要性が大きい。

この吉野町に金峯山寺（キンブセン）があり，その中に藏王権現をまつる藏王堂がある（なお藏王権現は，大峯山上の大峯山寺にも祭られている）。

さて，吉野熊野の山々を修業の場とする修験道（山伏）は，その霊験を藏王権現によって体得せんとした。藏王権現は，釈迦，観音，弥勒の徳を一身にそなえ，諸魔・七難を押えこむ霊験をもつと信じられた。七難というのは，人力ではいかんともできない諸悪（鬼難）としての，火難，水難，風難，日月薄蝕難，亢陽難，星宿変怪難，悪賊難（怨賊難）をいう。このような七難即滅と共に，七福即生を生ぜしめる藏王権現は忿怒身（フンヌシン）の姿をとる。

奈良県　大峰山系の鬼　　（奈良県　吉野町）

大峰山系と鬼（広義のもの）との関係については，次の3つものが存在すると筆者は考える。第一は，吉野から山上ケ岳を通り熊野へ通ずる1,500～2,000m級の荒々しい山並みの神秘的な状態を，アニミズム（神秘的な鬼）とみた。第二に，この山岳地帯は，豊富に山林資源，水資源，鉱物資源の存在と共に各種の自然災害や鉱業の存在場所でもあるため，地区の人々はそれを鬼として位置づけた。第三に，このような神秘的な山々を基盤に修験道（藏王権現）が確立されたが，従来そこにいすわっていた土賊などを鬼とみなし，その調伏を行った。これが花まつりの鬼払いである。この鬼払いによって藏王権現による吉野熊野連山の完全支配が実現するのである。

第一の点については，大峰山脈は，きびしい山並が走り（岩，崖，断層など），風，雲，雷，大雨，洪水などが年中襲いかかると同時に，原始林や杉桧の大木や薬草等を繁茂させ，神秘的な霊気（霊鬼）をただよわせている。

第二の点については，この山岳地帯には，銅や水銀なども埋蔵され，ときには鉱毒害などもひきおこしている。したがって，このような資源の所在関係を下流の人々は鬼のすむ所とみたのである。

第三の点については，呪術者である役小角は，奈良時代に，和泉葛城から大峰山系の厳しい山地に入り，難行苦行ののち，修験道を体得し，さらに平安後期において山岳宗教を確立した。ここでいう修験道とは，いうまでもなく，霊験（呪力）によって，病気や災難などをおこさせる悪魔を，調伏させる呪術（まじない）をいう。その際，修験道を妨げる鬼たちが現れるので，降魔の忿怒象として藏王権限が現れる。悪魔の追放によって藏王権限による吉野熊野の完全支配が達成されるわけで，毎年行われる節分の追難行事（現在は四月）も，そのような鬼払いを意味する。

奈良県　蔵王堂の追儺　　（奈良県　吉野町）

吉野山の金峰山寺・蔵王堂では，四月の花会式（ハナエシキ）に，追儺の行事が行われる（昔は二月の節分に行われたが，現在は，多くの花見客がのぼってくる四月の花会式に行われる）。この会式では，山伏が法螺貝と太鼓をうちならすと，今まで堂内で暴れまわっていた青鬼（斧をもつ），黒鬼（剣をもつ），赤鬼（タイマツをもつ）は，修験道の霊験によって折伏され懺悔して仏の弟子となり，悪疫退散，五穀豊饒という春を迎える仏事に協力する。

奈良県　前鬼　　（奈良県　下北山村）

下北山村は，奈良県の東南の隅にあって，北山川と国道169号に沿っている奥地山村である。奈良県の大峰山脈の南端に近いところ（下北山村）に，前鬼という集落がある。ここには修験道の盛んであった頃から，屋号を，五鬼熊（ゴキクマ），五鬼繼，五鬼上，五鬼助，五鬼条という五戸の家が存在した。この五戸は自他共に鬼の子孫といい（役行者の子孫），他の集落の家とも縁組せず，五戸相互で嫁のやりとりをしながら，今日まで約1,000年以上も半自給的経済生活をつづけてきた。例えば，家族員の日々の生活に必要な雑穀，豆類，野菜，小家畜などは自家生産をした。又，現金収入の道としては，木炭や山菜の販売以外に，吉野から尾鷲への旅人や，修験道（山伏）のための宿の提供などをすることにより，何ほどかの現金収入を入手した。なかでも京都の聖護院や三宝院の山伏が大峰へ入る場合の道案内として，これら五戸の家はかかせない存在として高い地位を保持していた。

さて，これら五戸の家筋が鬼の子孫といわれるのは，葛城山系の生駒山で役行者によって調伏せられた親鬼（義賢，義覚）が，生駒山，葛城山から吉野をへて大峰山系に入り，最後に下北山村に住みつき，五人の子供をつくったと言われる。

なお，五戸の家筋も時代の推移と共に，漸次，山を去る家がつづき，現在は，五鬼助家（本名，五鬼義本氏）のみが，夏場だけ山小屋を経営しているという寂しい状態にある（『奈良県，下北山村史』参考）。

奈良県　天川村の鬼の子孫（奈良県　天川村）

天川村は，修験道の霊地である大峯山（山上ケ岳1,719m）の南麓にあって，十津川（天ノ川）の上流に位置し，洞川（820m）はその登山口である。

奈良県天川村（テンカワムラ）坪内集落に，柿坂という神主の家があるが（天川の弁財天），この家は鬼の子孫だと自負している。

天川村洞川にも同様に，鬼の子孫という家がある。いずれも大峯山系の修験道と関係していたためと思われる。

奈良県　法隆寺の邪鬼　　（奈良県　斑鳩町）

法隆寺などの仏教寺院の金堂では，中央に須弥壇（シュミダン）がおかれ，そこに釈迦如来や阿弥陀如来などの本尊佛を安置する。又，四隅には，四天王を配置した。四天王とは，持国天，広目天，増長天，多聞天などをいい，甲冑をつけて武将の姿をし，忿怒（フンヌ）の，いかめしい顔付をしている。その任務は，いうまでもなく暴れまわる邪鬼を押えつけ，本尊佛を守護することにある。つまり，須弥壇の警護的役割である。

なお，東大寺三月堂の執金剛神も，金剛杵をもち，仏を守る夜叉神（ヤシャシン）として，本尊の横に立っている。つまり，本尊仏の不空羂索観音（フクウケンジャク）を邪鬼から守護せんがためである。

要するに，人間社会における三重構造，例えば，善人→悪人（善人に危害を与えんとする鬼）→悪人取締人（鬼よりさらに力の強い用心棒）という多重構造で，社会の秩序と平和を維持せんとしているのと同じ関係が，佛の世界にもとり入れられている。

なお，天邪鬼（アマノジャク）は，記紀にみえる天探女（あまのめぐめ）の系統をひくといわれている悪鬼。又，何事につけても，屁理屈をつけて反対する人間をいう。

又，須弥壇と須弥山の関係をみると，次のようになっている。印度仏教の宇宙観では，世界

の中心に須弥山（シュミセン）という高い山がそびえている(ヒマラヤ山に相当する)。須弥山の山頂には，佛法を守るための保護神として，最高位に帝釈天がいる（白象に乗り独鈷をもつ)。その下に四天王が配置され，須弥山の周囲は，丸山八海に囲まれ，太陽，月，星などが存在するという立体的構造になっている（天動説的考え方である)。

奈良県　修二会　　（奈良県　奈良市）

二月堂は東大寺の東側にあって，新暦三月のお水取行事は有名である。

修二会とは旧暦二月に行われ，旧年の悪座（鬼）追放と陽春の到来を祝う佛教行事である（新暦では三月に実施)。

奈良県　鬼の俎，鬼の厠（奈良県　明日香村）

明日香村は，わが国において，古代中央集権国家（律令国家）のはじめて形成された地域であり，飛鳥文化の中心地でもあり，その保存のための特別措置法も施行されている。

その中に，鬼の俎（マナイタ）と，厠（カワヤ）という大きな平板の石がある。おそらく，古墳の底石ではなかったかともいわれるが，ともかく，その奇妙な形を鬼の行動にかこつけたとみてよい（律令国家の律とは刑法，令とは行政法をいう)。

和歌山県　中津川の鬼の子孫
（和歌山県　粉河町）

粉河町は紀の川中流のみかん，野菜などを産する豊かな農山村であり，西国第三番札所粉河寺がある。粉河寺の北2㎞の和泉山脈の中腹に，中津川という小集落がある。この集落に，鬼の子孫という5戸の家がある。これらの家は和泉葛城山の大先達である（行者堂というのが現にある)。又，粉河町の地名として粉河という名の通り，この谷筋には和泉砂岩の風化した白い砂が流れくるので，下流の人々は，それを恐れて鬼の仕業と見たのかもしれない。その他，粉河寺の鎮守は丹生神社であり，この丹生神社は天野村の丹生都比売神社を粉河に顧請したものである（分霊を迎えた)。

ともあれ，鬼の名のついた最大の根拠は，葛城修験道と関係して鬼の子孫といわれたものと思われる。なお俚謡に「千両くれても中津川いやよ，鬼の巣じゃもの，谷じゃもの」とあるが，仕事や生活慣習なども，平地の人々と多少異なっていたため，全国各地の鬼の名のつく集落と同じような歌が，この地方でもつくられたのかもしれない。

和歌山県
金屋・丹生・丹生都比売神社・金剛峰寺
（和歌山県　金屋町・かつらぎ町・高野町）

和歌山県の有田川およびその北側の長峯山脈は古生層の地質で東西に走っている。古くから水銀など鉱物の生産地である。それに因んで，金属に関係する地名が多い。空海が丹生都比売（ニヒユツヒメ）に案内されて金剛峰寺を真言宗の本山としたこととか，さらに四国八十八カ所の有名寺院の中に中央構造線の南側に位置する石鎚山などの札所寺院をつくったことなど，金属との関係が深い（例えば，屋島，善通寺，石鎚山など)。

和歌山県　加久鬼　　（和歌山県　金屋町）

金屋町は有田川支流の修理川沿の山村地帯である。金屋という名は，金属あるいは製鉄と関係していたのではないかといわれる。又，この地域は水銀（丹生）との関係も深い。

加久鬼（カグキ）は，有田川支流の修理川集落の少し上流にあった集落であった。これらの人がどんな仕事をしていたかは不明ですが，炭焼きとか，あるいは，鉱物の採掘をしていたのかもしれない（平家の落武者であるとか，カグキがなまって，オンオケとか言われたともいう)。

ところで室町時代の頃，この地区の人々はその山村から離れて(追出されたともいう)，吉備町へ集団移住したと伝えられている（役場で聞いたが，はっきりしたことはわからない)。

和歌山県　鬼島　　（和歌山県　那智勝浦町）

那智勝浦町はリヤス式海岸にそって，温泉も湧き出て，林業と漁業のまちである。

鬼島は弁天島のすぐ南の小さな無人島である。鬼島の由来は役場でも不明。

鳥取県　鬼林山・牛鬼　　（鳥取県　日南町）

鬼林山（キリンザン）1,031mは鳥取県の西端の中国山地の中にあって，日野川（ヒノカワ）の最上流にある。鬼林山のある日南町には，妙見山725mもあり，この地帯は鉄鉱山が多く，日本最大の産出量を出すクローム鉱山がある。神話に出てくる「むらくもの剣」が出てきたのもここである(渡来系の出雲文化発祥の地)。したがって鬼林山という地名が出たのも不思議ではない。

なお，鬼林山に牛鬼が住んでいたので，大和政権の孝霊天皇が鬼狩をしたというのも，鉄資源確保のためであろう。

島根県　オロチ（鬼）退治伝説
（島根県　斐川町）

スサノオが八岐の大蛇（ヤマタノオロチ）を退治したという神話が出雲地方にある。天照大神の弟であるスサノオが，上流のオロチ，つまり砂鉄を採取している人々の退治になぜ出かけたかというと，一つには，下流の農耕民が，上流から流される砂で天井川となり洪水害をうけたことと，二つには，下流の農民が上流でつくられる玉鋼という資源を入手したいと考えたからである。むしろ後者の方が主たるねらいであったとも言ってよい。

島根県　鬼の舌震　　（島根県　仁多町）

仁多町は出雲市から30km上流の斐伊川沿の山村である。

鬼の舌震（したぶるい）といわれる特異な地形の渓谷ができたのは，河床の花崗岩が，馬木川の急流による侵食によって，段階的なV字渓谷を形成し，その結果，現状のような瀑布や深渕を各所につくったのである。

伝説によると，昔，仁多町に王日女命（タマヒメノミコト）という美しい姫がいたが，日本海に住む鰐（ワニ）が姫に恋をして，斐伊川をさかのぼった。そしてワニが，恋震いをしたため，このような奇怪な川底をつくったと伝えられている。

さてワニという名のもとに，海岸地域の出雲の人（朝鮮系の人が多い）が，40kmも上流の仁多町までさかのぼってきたのは，この地域の砂鉄資源を求めてやって来たためで，地元の人はこれらの渡来系の出雲族を鬼として表現したのではないかと筆者は推察する。因みに，この地域は，昔，スサノオが大蛇退治をしたとき，大蛇の尾から剣が出て来たという出雲伝説の所在地でもある。つまり，この地域はタマハガネの原料となる良質の砂鉄や燃料炭（広葉樹）の産地でもあった。

島根県　一つ目の鬼　　（島根県　大東町）

大東町は穴道より南20kmに位置し，斐伊川の支流に沿っている。ここにはモリブデンを産出する大東鉱山がある。又，出雲神代神楽も有名である。鋼にモリブデンを入れると，硬度と引っ張りの強い特殊鋼ができ，刀具，弾丸，磁尺の材料として，今も昔も貴金属として重宝されている。

ここで，「鍛冶屋の神は，片目の神(一つ目の神)」という伝説の根拠を考えてみたい。その一つとして，鍛冶屋は鉄を打つ，つまり，「固める」から，片目の神となったといわれる。又，別の意見として，タタラ師は，炉の色を常に片目でみているため，その眼が悪くなり，ついに片目になったともいわれる（色を識別するには，片目の方がよくわかるため，通常，片目でみる)。

又，山にいる一つ目の神が，里の農民を「喰った」という話も出雲地方には存在する。この話は鉄器の武器や道具をもった人種が，石器あるいは木工段階の旧住民を支配したということとか，あるいは，又，上流でタタラをしていた人々が，下流の農耕地を害したということを，「人を喰った」と，たとえたものと思われる。

島根県　鬼村　　（島根県　太田市）

太田市大屋町鬼村は，太田市の西端の旧岩見銀山の下流にある。鉱山ならびに修験道との関係から地区名に鬼の名がついたとみてよい。

島根県　鬼ケ城　　（島根県　西島町）

鬼ケ城は，隠岐島（島前）の西ノ島町の国賀海岸の北端にある断崖をいう。この断崖は，日本海の荒波によって削りとられたもので，そのささくれた地形を鬼の仕業とし，又，鬼の住む場所（城）と考えたのである。

なお，隠岐の岐は，鬼にも通じている。壱岐の岐とも似ている。又，隠は，かくれるということで，結局この島には鬼（渡来人）が隠れているということになるのだろうか。

岡山県　鬼城と桃太郎伝説（岡山県　総社市）

総社市にある鬼山（キザン）は，標高403mとやや高い山で，石垣をきずいた鬼城(キジョウ)がある。鬼山を含めてこの地域一帯は，実は5世紀の頃，朝鮮の伽倻の人（カヤ，任那）が，出雲をへて，この地方で採掘される砂鉄を利用してタタラを行っていた場所といわれている（その証拠に，この地方の古墳では，多くの鉄剣などを副葬品として埋蔵している)。

大和朝廷が，5世紀のころ，孝霊天皇は吉備津彦をして，この地を平定せしめたという神話がある。その背景として，実は，大和地方には存在しなかった鉄資源を確保するためであったと考えられる。鉄はいうまでもなく，武器として，又，米の増産に必要な農機具の材料として，きわめて貴重な存在だったからである。そのため大和朝廷は，鉄資源の豊かな備中および出雲を支配せんとした。それが鬼退治の名のもとに行われた備中遠征であった。

吉備の国を支配することに成功した大和政権は，吉備津彦を吉備津神社に祭った。おな同神社では，退治した鬼をも同社のウシトラの隅(鬼門）に祭っている。又，同神社では，春秋の大祭に釜鳴神事（カマナリ）というめずらしい湯立神事（ユタテ）を行っている。そのやり方は，鉄の大釜に水を入れて，老女が祝詞に併せて竈の火を燃やす。そうすると，釜が沸騰し鳴動するが，これは鬼（百済の温羅ウラ）の泣く音であるといわれ，鳴動の大小長短により吉凶を占うことになっている。

なお，吉備津彦の備中遠征をモデルにして，御伽草子（オトギソウシ）にしたのが，桃太郎伝説であるともいわれる。桃太郎伝説には，香川県の女木島（鬼ケ島）の鬼を，桃太郎がサル，キジと共に退治し，サンゴなどの宝物をもち帰ったというのも有名である。しかし，資源的にはサンゴなどの宝物よりも，鉄の方がより重要であったことから，吉備津彦の備中の鬼ケ城支配を鬼退治のルートとしてより重要視する意見が強い。

岡山県　鬼ケ城山
（岡山県　佐伯町・山口県　錦町）

鬼ケ城山1,031mは，広島県の西端の佐伯町と山口県の錦町との境にある。この山はけわしいだけでなく，その山頂に安山岩の巨石がある。

岡山県　鬼ケ岳　　（岡山県　矢掛町）

矢掛町は，岡山市と福山市とを結ぶ旧街道沿のまちで，総社市の西側にある。

鬼ケ岳は矢掛町の北部にあって，鬼の名のついたのは，総社市の鬼城山と同じく，鉄鉱石を産出した山であったためと思われる。

鬼ケ岳温泉は，大和政権の命により，吉備津彦が鬼城山の鬼退治をしたとき，傷ついた鬼(渡来人）たちが治療した温泉であるという伝説がある。

岡山県　牛鬼　　（岡山県　牛窓町）

牛窓町というのは，岡山市の東20kmの瀬戸内海に面した交通の要衝で「牛窓千軒」というように家が多かった。

牛窓という地名は，牛鬼からきたともいわれるし，前島との間に潮（ウシ）がさすから，牛窓といわれたともいう（町役場の話)。

神話によると，仲哀天皇と神功皇后が三韓遠征のさい，岡山県の牛窓の所を通った。そうすると，鹿輪鬼（チンリキ）という頭八つの大牛が，

天皇におそいかかったので神功皇后などはこれを討った。しかし，天皇は遠征の途中で残念にも死んだ。

朝鮮からの帰路，この牛窓地方を通ると，再び鹿輪鬼が現われたので，畿内軍団はこれを全滅させた。その場所を牛転(ウシコロビ)といったのを，なまって牛窓（ウシマド）になったという。

なお，これは畿内政権が牛窓地方の海上権をもっていた集団（牛鬼）に対する挑戦とその支配とみてよいだろう。

岡山県　由加山の鬼　　（岡山県　倉敷市）

由加山（ユカサン）は，倉敷市の東南部の丘陵地である。由加は瑜伽（ヨガ）という宗教的実践からきている。そこに阿久良王（アクラオウ）という鬼がいて，里にきて物を奪った（アクラ王は桓武天皇の弟で，この地に流されたという故事がある)。そこで坂上田村麿がこれを退治したというのが伝説の筋である。

岡山県　鬼の投石　　（岡山県　玉野市）

玉野市は岡山県の南部の瀬戸内海側のまちであり，従来，宇高連絡船の基地であった。

鬼の投石は，玉野市出崎半島の先端の角形の大岩をいう。この地域には，大きな花崗岩が出る地質が元来あった。

さて，伝説によると，十禅寺の山頂から，鬼が大きい岩をこの土地に投げこんできたのがこの岩である。

岡山県　鬼ケ岳温泉　　（岡山県　美星町）

美星町は，倉敷市の北西20㎞のところの農山村であり，弥生期の住居跡もある。

鬼ケ岳温泉は中国山地のタタラとも関係しているのではなかろうか。

広島県　鬼ケ城山　　（広島県　三次市）

三次市（ミヨシ）は江川の上流の三次盆地の中心地で，古くから砂鉄生産が盛んで，古墳も多い。

鬼ケ城山444ｍは岩山であるが，やはり鉄と関係が深いと思われる。

広島県　安芸厳島　　（広島県　宮島町）

安芸（アキ）というのは，山鬼（サンキ）からきているといわれる。厳島神社の山頂を，御山（ミセン）という。

山口県　鬼ケ城山（山口県　豊浦町・下関市）

豊浦町は山口県の西端の日本海に面した漁山村である。鬼ケ城山620ｍは，豊浦町と下関市との境にある。奈良時代に，この山の中腹に朝鮮（鬼）の侵攻にそなえ，日本側は山城をつくっている。

山口県　鬼の岩屋　　（山口県　山陽町）

山陽町は小野田市の北のまちで，従来は石炭を産した。このまちの海岸近くに横穴式古墳(円墳）が存在した。この横穴を鬼のすむ岩屋とみたのである。なお，古墳の主が渡来系の人であったため，鬼といったのかもしれない。

徳島県　鬼籠野　　（徳島県　神山町）

神山町（カミヤマ）は，徳島県の中央の鮎喰川（アイクイ）の流域にあって，四国へんろの難所の寺としての焼山寺（ショウザンジ）のあるまちである。神という名は，徳島の平野部に対して，上（カミ）という意味である。

さて鬼籠野（オロノ）は神山町の東部にあって旧村名でもあるが，その地名の由来として，この地方に悪鬼がいて住民を悩ませた。そこでアメノコヤネノミコトがこの悪鬼を谷へ落として退治したとある。この地方には鉱山もあるため，これに関係した人を鬼とみたのかもしれない。

香川県　鬼ケ島　　（香川県　高松市）

高松沖の鬼ケ島は，鬼が住んでいた島として，古くから文学作品や昔話などに，しばしば登場する。例えば，保元物語，御伽草子（オトギソウシ），桃太郎伝説など。その場所であるが，高松市の沖合４㎞ほどのところにある女木島（メギシマ，４㎢）をさした。この島の人々は，漁

業，海運業，石切場の仕事をすると共に，中には海賊的仕事をしている人もいたので，鬼の住む島として恐れられた（伊予の村上水軍と同じ性格をもっていた）。

さて，桃太郎伝説では，この島には，金銀，珊瑚をもつ鬼の頭目がいるというので，桃太郎がサル，キジと共にこれを「鬼退治」の名のもとに，これらの宝物を奪取するということになっている。又，そのような侵略行為が悪ではなく武勇的行為として，従来，讃美的に国定教科書などでもとりあげられてきたのである。

このような鬼征伐の真相として――支配者の常套手段として――相手を攻略するための口実に，相手を鬼呼ばわりしてきたと筆者は思う（第二次大戦中，日本の軍閥は，中国支配の戦略として，このような方法をしばしば用いた。又，アメリカを鬼畜米英と呼んで敵愾心をあおった）。

なお，女木島を鬼ケ島と呼んだことの今一つの理由として，この島には，大きな岩穴があるため，その奇怪な地形を鬼の住み家と素朴に考えたこともみのがせない。

この昔話の筋を，もう一回まとめてみると，桃の中から生まれ出た小さな桃太郎が，成人したとき，犬，猿，雉（キジ）をひきつれて，鬼ケ島の鬼を退治し，その持っていた宝物を持帰るという忠孝武勇談が，主たる内容である（宝物以外に，美しい娘さんを連れて帰ったという筋書きもある）。この昔話（御伽噺）は，室町時代（15世紀頃）におこったといわれているが，その背景として，次のようなものがある。鬼ケ島というのは，瀬戸内海の高松沖の小島で，水軍あるいは海賊などの海上豪族の根拠地であったといわれている。当時は，中国の明（みん）との間に海上貿易も盛んであり，瀬戸内海に海賊的集団が現れて，御朱印船などを襲い，その宝物などをせしめる者（いわゆる鬼）も，時にはいたので，このような話がおこったのかもしれない。

この昔話では，桃太郎という英雄があらわれて，鬼という名の海賊征伐を行うわけであるが，鬼の方は，それほど抵抗することもなく，桃太郎に降伏し，宝物をさし出して，命だけは助けてくださいと嘆願するなど，桃太郎の一方的勝利に終わっている。

ところで，桃太郎伝説（英雄神話）が，戦前の日本において，もてはやされたのは，鬼退治にかこつけて，国土が狭く，資源の乏しいわが国が，大国（資源保有国）に対し，帝国主義的支配を行うことを合理化し，又，そのような軍事行動，つまり，桃太郎はじめイヌ，サル，キジ，などの家来と共にやった侵害戦争が，忠孝武勇的行為として，賞讃せんとした思想的背景がある。

昔話（お伽話）は，桃太郎にしても，かちかち山にしても，主として，子供に聞かせるためにつくられたものであるため（口承文学），その内容が童話的であると共に，空想的・非現実性（奇異性）や教訓性はやむをえないが，その裏にある，戦前の軍国主義的時代という背景も，われわれ大人たちは忘れてはならない。

（注）桃と人間とのかかわりあい（桃の植物学的特徴）

中国でも，日本でも，人間は古くから桃とのつきあいをしてきた。中国では，陶淵明などの文人をはじめ，一般庶民も，桃園（桃花）をたのしみ，果実は不老長寿の薬とした（仙果）。日本でも，縄文や弥生遺跡からも，桃の実が出てくるように，人間は早くから桃の植物学的特徴をよく知り，これを利用した。すなわち，桃は成長が早く（モモ，クリ三年，カキ八年，ミカン九年の諺のように，モモは三年で実がなる），また，落葉樹で適地性が広く，花は早春に一斉に開き，桜よりも美しいともいわれる。果実は甘く，桃酒は毒を下し，病を払って安産するという不老長寿の果実である（但し，酸は少ない）。又，桃太郎という子供は，生まれたときは小さく，早く大人に成長するというのも，桃の木の生態系と関係しているとおもう。

桃太郎の昔話では，桃太郎（男の子）の出生ルートとして，川に流れてきた桃の実から，桃太郎が生まれたということになっている

（異常誕生の話といわれるもの）。ここでいう桃というのは，木篇に兆という字の如く，子供を多く生む植物であると共に，その形，核などが，女性の性器（象徴）と関係しているのではなかろうか，と筆者は推測する。なお，それ以外に，桃太郎出征については，流れてきた桃を食べて，おじいさんとおばあさんは若返って，子供ができた。それが桃太郎だという筋書きもある。

桃の実は，中国でも日本でも，鬼（邪鬼）を払う果実（呪物）としてとりあげられた。なぜ梅でも桜でもなく，桃が使われたのかの証拠として，次のような話が日本や中国に存在する。日本の場合，イザナギの奥さんのイザナミが，火の神を生んだため他界する。そしてヨミノクニに住むことになる。夫のイザナギは，亡くなったイザナミをヨミノクニにたずねていくと，その体は腐敗して醜女となっている。そこで男神は，ヨミノクニから逃げださんとするが，悪魔においかけられる。男神は，その難をのがれるため，ヨミノクニの比良坂（ヒラサカ）で，たまたま近くにあった桃の実三個（仙果）を悪魔になげつけ，やっとのことで，その難をのがれたというのである。又，平安時代には，追儺のさい，桃の枝で鬼を追払ったともいわれる。

他方，中国でも，桃は天候の異変をおこさせる鬼を追払う呪物（魔よけの力のある果実，仙果）であり，三月の桃の節句は，春の到来を祝う節句で，五月の菖蒲や九月の菊と同じく式日である。鬼門に桃を植えると，厄除けになるとか，陶淵明は桃畑を通って桃源郷へ行くというように，桃は異世界への通路となるというように，目出度い木とされた。

なお，わが国では，鬼退治をしたのは桃太郎だから，鬼を払う呪物として桃が出てきたと考える人もいるが，これは話があべこべのような気がする。というのは，桃太郎の名は，桃の実から生まれたといのうで，その名がついたのであって，桃太郎から桃を引き出そうとするのは，話が逆になるからである。

さきに，鬼払いの呪物としての桃が重宝されたとのべたが，そのさいの呪物とは，鬼払いとか，厄払いとか，魔除けなどの呪術的宗教行為に使われる道具をいう。呪物は，通常，神聖されることが多い。例えば，修験道が鬼払いのさい使うヒイラギの木とか，豆とか，又，死霊につく悪魔払いの剣やシキビなどである。節分祭に寺社の発行する厄除の護符なども，一種の呪物といえる。

香川県　高松市　鬼無町　（香川県　高松市）

鬼無町（キナセ）は，高松市の西端にある平野地帯。この付近には渡来系の人の古墳も存在する。それらの人々は，すぐれた技術をもって，須恵器の生産や，花崗岩の採掘や石棺などの石割（鉄の矢が必要）などを行っていたと思われる。

5世紀頃の大和政権の支配者である應神天皇（八幡宮）が，韓国の鬼を退治したことによって，この地の鬼がなくなったとう伝説がある。おそらく大和政権の中国四国支配の神話化とみてよいだろう。

香川県　鬼ケ崎　（香川県　内海町）

内海町（ウチミ）は，小豆島の東端のまちである。

鬼ケ崎の由来は，応神天皇が朝鮮へ出兵のとき，御荷物がこの地点（草壁港のすぐ西）へ到着したので，オニガサキという名がついたとの伝説がある。

愛媛県　鬼ケ城山
（愛媛県　宇和島市・津島町）

鬼ケ城1,151mは，宇和島市とその南の津島村との境にある高い山である。その姿が，角のある牛を怒らした姿（牛鬼）に似ているので，鬼ケ城山の名がついたといわれる。

愛媛県　鬼ケ峠（愛媛県　三間町・宇和島市）

三間町（ミマチョウ）は，宇和島の北10kmの盆地で，高知県へ流れる四万十川の上流に属し，やや内陸的気象の地域である（霧が多い）。

鬼ケ峠は，宇和島市との境にある。宇和島湾

のリヤス式海岸を鬼のいるところとみたのかもしれない。

愛媛県　餓鬼の森　　(愛媛県　久万町)

久万町（クマ）は，松山市の南30kmの国道33号線沿の山村集落である。

餓鬼の森（ガキノモリ）954mは，久万高原の中央にあって，頂上には巨岩があり，権現様が祭られ，修験道の霊場である。地方では「小石槌」(行者たちの集まる小さな石槌山)と呼んでいる。餓鬼とは，現世における悪業の結果，死後，飢渇に苦しむという佛教の教である。

愛媛県　鬼ケ城　　(愛媛県　広見町)

広見町は，愛媛県の西南部に位置し四万十川の上流の盆地である(予土線が通過)。鬼ケ城山1,115mは，広見町と宇和島市との境にある。山の西側（宇和島湾方面）は，渓谷とか温泉とかの多い秘境的なところから，鬼の名がついたと思われる。

愛媛県　鬼の岩屋　　(愛媛県　新宮村)

新宮村は吉野川上流の銅山川沿の村で，愛媛県の東端の村である。

この地は，瀬戸内の川之江から高知への最短ルートとして，古くからひらけた（平家の落人の村ともいわれた)。新宮村の名も紀州の新宮から熊野神社が勧請されることによってつけられ，奈良時代には国司の通った道でもある（現在は四国横断自動車道のルート上にある)。ここにある鬼の岩屋というのは，大きな岩の中に横穴があいているので村人はそのように呼んだ。

愛媛県　鬼原　　(愛媛県　玉川町)

玉川町は今治市の南10kmの蒼生川沿に位置する。

この町には中世の山城があり，越智一族が支配したところである。支配者は旧住民を鬼とみたのではなかろうか。

愛媛県　三島神社の鬼祭　(愛媛県　肱川町)

肱川町（ヒジカワ）は，大洲市の東20kmの山村である。

そこの三島神社の祭に出る鬼は，幸をもたらす鬼とされ，この鬼にたたかれると，たくましい大人になるという伝説がある。

高知県　朝倉の赤鬼山　(高知県　高知市内)

朝倉地区は高知市の西の方にある。この地方の山には，赤錆の砂鉄が出るので，赤鬼山（アカギ）の名がついたといわれる。

福岡県　鬼古賀　　(福岡県　大川市)

大川市は筑後川の河口の三角洲地帯にある。鬼古賀（オニコガ）は，渡来系の人（鬼）の首をうめた御塚（オンヅカ）のある所から，その名がきているといわれている。又，神功皇后が朝鮮遠征の帰りに，ここへ船をつけたところといわれ，木工業や木造船の栄えたところでもある。古賀（コガ）は木加工から転化したのかもしれない。なお，作曲家，古賀政男も同市の出身地である。

福岡県　鬼木　　(福岡県　豊前市)

豊前市は，福岡県の東端の市である。

ここには求菩提山（クボテイ）782mという修験道の山がある。そこに楠の大木があって，その楠の木に山からおりてきた鬼が顔をぶちあてて死んだ。そこに木のコブができたので鬼木(オンギ）というとのこと。

福岡県　鬼津　　(福岡県　遠賀町)

遠賀町は，遠賀川左岸のまちである。

鬼津（オンツ）は，菅原道眞が京都からこのまちを通って太宰府へきた官津（カンツ）から，オンツに転化したといわれている。

佐賀県　鬼ケ城　　(佐賀県　浜名町)

浜名町（旧玉島村）は，唐津湾の東岸にあって，朝鮮からの渡来人に対する防衛線であり，城山383mに鬼ケ城の名がつけられたとおもう。

佐賀県　鬼塚　　(佐賀県　唐津市)

唐津市は，玄海灘に面し，その字の通り，日

本から大陸（カラ）に渡るみなとである。つまり，神功皇后や秀吉の朝鮮出陣の地でもある。

唐津市養母田（ヤブタ）の鬼塚は，この地方を支配した木角というものを，松浦氏が攻略しその殺した死体を埋めた塚である。鬼塚はＪＲの駅名にもなっている。

大分県　鬼塚古墳　（大分県　国見町）

国見町は国東半島の北端にあって，佛教文化の遺跡が多く残っている。

鬼塚古墳（オニヅカ）は横穴式石室をもつ円墳である(壁画もあって国史跡)。おそらく渡来系の人を埋めた古墳であるため，鬼塚といったとおもう。古墳の主は，国見町の対岸の姫島(秘め島）の国曜石の支配者ではなかろうか。黒曜石は火山岩の一種で，割れ口が貝殻状でシャープなため，古代人にとって矢尻の製作にかかせないものであった。

佐賀県　鬼ノ鼻山　（佐賀県　多久市）

多久市（タクシ）は，佐賀市西15kmの農山村である。

鬼ノ鼻山464ｍは，市の南部にあって杵島炭鉱のあった大町（オオマチ）との境にある。この付近には縄文土器遺跡や渡来系の人による有田焼の窯跡が存在することから，鬼の名がついたと思われる。

なお，佐賀県では，鬼塚といわれる地名は，鹿島市，太良町，塩田町，日石町，東背振村，武雄市など各地にある。渡来系の人々の墓などと関連があるのだろうか。

佐賀県　鬼木　（佐賀県　鎭西町）

鎭西町は，佐賀県の北の端にあって，秀吉の朝鮮出兵と関係のある名護屋城（ナゴヤ）がある。

鬼木の由来は不明であるが，渡来人との関係があるのではなかろうか。

佐賀県　鬼塚平　（佐賀県　太良町）

太良町（タラ）は，佐賀県の南西端のまちである。昔話として，海の幸が多く，食物豊かなため「豊足の里」（ユタタリノサト）といわれた。

鬼塚平は町の南端にあり，その由来は不明であるが，渡来人との関係があるのかもしれない。

長崎県　鬼石　（長崎県　小浜町）

小浜町（オバマチョウ）は，雲仙岳の西斜面のまちである。

鬼石は，雲仙岳が大爆発したとき，落下した石といわれる（長さ12ｍ，幅11ｍ，厚さ６ｍ）。地元の人は，この石には鬼の霊が宿っているといって，石材に割って利用しようとする人はいないという。

長崎県　餓鬼島　（長崎県　小佐々町）

小佐々町（コザサ）は，佐世保市の西10kmの北九十九島沿の町である。その海上に浮かぶのが小さな無人島の餓鬼島である。死霊（餓鬼）がこの島にいたとか，奇岩があるわけでなく，原因は不明と町の方ではいっている。

長崎県　鬼の岩屋　（長崎県　松浦市）

松浦市は北松浦半島の北端にある農山漁村である。

松浦市志佐町の石盛山415ｍに，鬼の岩屋伝説がある。この山にすむ彦四郎という男が，山頂に岩屋をつくりたいと計画し，人足を集めて石を運んだ。途中で計画が頓座したが，山頂の天井岩が残ったと。おそらく古代における古墳計画を寓話にしたのではなかろうか。

長崎県　鬼岳　（長崎県　福江市）

福江市は長崎市より約100km離れた五島列島にある。

鬼岳315ｍは，福江市の東端にあって，玄武岩の溶岩台地にあり，頂上に火口岳があるため，鬼の住んでいた山と考えられたのであろう。

長崎県　壱岐の地名　（長崎県　壱岐）

壱岐の地名であるが，岐は鬼である。壱は，対島の二に対して，一の鬼の島からきたのではなかろうか。

なお，この島には雪連宅満（ユキノムラジ，

ヤカマロ）という人がいて，卜術（ボクジュツ）を心得えると共に，大和政権の朝鮮への案内役をつとめた。この人の名にちなんで「雪の島」（ユキノシマ）といい，それが壱岐となったともいわれている。

長崎県　鬼の足跡　（長崎県　郷之浦町）

郷の浦町は，壱岐島の西部地区のリヤス式海岸地帯にあって，漁村である。

渡良牧崎にある「鬼の足跡」は，海蝕にできた奇怪な崖のトンネルを，鬼の出入りした足跡と考えたのである。よりくわしく述べると，玄武岩中にできた海蝕洞の上部が陥没してできた凹地で，直径110m，断崖の高さは30mと大きい。

長崎県　鬼の足跡　（長崎県　勝本町）

勝本町は壱岐島の北部地区のまちである。この島には，元寇史跡や渡来系の豪族の古墳も多い。

勝本町辰の島の，鬼の岩屋あるいは鬼の足跡は，第三紀層の柱状節理が波食によってできた断崖や洞窟であり，高さが50mにも及ぶ。

長崎県　鬼凧　（長崎県　勝本町）

壱岐では，鬼がいるという鬼ケ島伝説と関連して，大空にあげる大凧（オオダコ）がある。鬼凧（オニダコ）がなまって，オニダと呼ばれている。三月の節句頃にあげられる。

長崎県　鬼の岩屋　（長崎県　芦部町）

壱岐の島全体で，5世紀頃の古代豪族（渡来人を含めて）の古墳が，200ほどもあるといわれる。円墳が多いが，横穴式も存在する。

芦部町国分の円墳は，直径50m，高さ15mと最も大きく横穴式で，すでに石室は盗掘により開口されている。これを鬼の岩屋とみたのであろう。

熊本県　球磨（隈）と鬼　（熊本県）

熊本県の熊とか，その南部を球磨（クマ）というのは，動物のクマではなく，隈（クマ），つまり，日本列島の隅（スミ）という意味である。

古代史関係の伝説によると，ヤマトタケルが天皇の命によって，この地方の先住民である熊襲（クマソ，鬼）を征伐支配したということになっている。

熊本県　鬼塚　（熊本県　松島町）

松島町は，天草上島の東端に位置し，日本の三大松島の一つといわれるほど景観がよい。

鬼塚は天草五橋の南部に位置し，古墳である。渡来系の人のものかどうかは不明であるが，一般に鬼塚と呼ばれている。

熊本県　鬼海ケ浦　（熊本県　天草町）

天草町は，天草下島の西端にあって，東支那海に面しており，自然景観に恵まれている。そのため鬼海（キカイ）という名がついたのであろう。

熊本県　鬼池港　（熊本県　五和町）

五和町は天草下島の北端にある。

この地は有明海への入口で，そこには早崎瀬戸がある。貿易船が外海から逃げこむ湾（池）ということでもあろうか。

熊本県　鬼の城　（熊本県　五和町）

五和町の鬼の城といわれている所に，山城があったとか，あるいはタタラを行っていた渡来人がいたとか伝えられている。

大分県　鬼山地獄　（大分県　別府市）

大分県別府には，別府十湯といわれるほど，多くの温泉群が存在する。これらの温泉は，それぞれ泉質もちがい，又，湯の噴出形態も特異なものが多い。例えば，海地獄，血地獄，坊主地獄，竜巻地獄および鬼山地獄など。このような奇妙な姿を地獄の状態とみ，又，そのような自然現象をつくったのは，鬼の仕業と昔の人々は考えたにちがいない。

なお，鉄輪山（カンナワ）には，熱湯のふきあげる穴の1つに「鬼山」というのがある。

大分県　鬼ノ岩屋古墳　　（大分県　別府市）

別府は温泉都市であるが，鬼ケ岩屋古墳は市の北の方の海岸よりにある。馬具などの副葬品もあって，渡来系の可能性が大きい。

大分県　鬼塚　　（大分県　三重町）

三重町は，大分県の南部に位置し，豊肥線および国道326号沿の地域である。

その中の秋葉集落では，南にすむ鬼と北にすむ鬼とがケンカし，南の山の鬼が負けて，その骨を埋めたところが鬼塚といわれている。二つの鬼の争いというのは，山の境界の戦いか，あるいは水争いをいうのであろうか。

大分県　鬼ケ原・鬼ケ城古墳
（大分県　玖珠町）

玖珠（クマ）町は，筑後川の上流で日田市の東30kmの玖珠盆地の中央に位置する。

鬼ケ城古墳は５世紀の横穴式円墳である。上部の覆土が流れ出し，棺の巨石が露出しているため，その奇怪な姿をみて，鬼の住む城と考えたと思う。なお，古墳の大きさは，玄室で，奥行３ｍ，幅2.5ｍである。

大分県　鬼ケ瀬　　（大分県　狭間町）

狭間町（ハザマチョウ）は，大分市の西10kmのところの大分川流域のまちである。

鬼ケ瀬は，大分川が大きくカーブし，急流（瀬）となっていることから，一般に，「鬼の瀬」といわれたものと思う。

なお，大分川の支流の由布川は水成岩の浸蝕によって，深さ60ｍ，長さ12kmに及ぶ神秘的な渓谷となっている（自治百科大分典より）。

大分県　鬼塚古墳・鬼籠　（大分県　国見町）

国見町（クニミ）は，国東半島（クニサキ）の北部にあって，古くからの遺跡が多い。鬼塚古墳は，横穴式で壁画がある。渡来人関係のものではなかろうか（姫島の黒耀石との関係もあるのかもしれない）。

鬼籠（キロ）はそれより２kmほど山よりの地である。鎌倉時代に，ある鍛冶屋職人が部屋に籠って日本刀をうっていたのを，村人がみて鬼籠（キロ）と呼んだとの伝説がある。

大分県　鬼会　　（大分県　豊後高田市）

豊後高田市の東の方の八面山にある天倉寺では，毎年二月に，タイマツをもった修験道が鬼を払う行事をする。これを鬼会（オニエ）といっている。

宮崎県　鬼の窟　　（宮崎県　西都市）

西都市（サイトシ）は，宮崎市の北西の一ツ瀬川流域にある。縄文，弥生，古墳時代の遺跡の集中的に存在する地域である（西都原古墳群は，東西２km，南北４km，平坦な台地にあって，300基あまりの日本で最大規模の古墳群といわれる）。

鬼の窟（オニノイワヤ）といわれている場所は，その中の横穴式石室のあるところで，鬼の住んでいた所とみたのである。あるいは，横穴式古墳の首領である渡来系の人を鬼とみたのかもしれない。

宮崎県　鬼ケ久保　　（宮崎県　高鍋町）

高鍋町（タカナベ）は，西都市の東10kmのところの海岸沿にある。

この辺一帯は，古墳群のある台地であり，窪地（クボチ）が，久保に変わったのかもしれない。

宮崎県　鬼ケ城山　　（宮崎県　日南市）

日南市は宮崎県の南部にある。

鬼ケ城山196ｍの由来は，この地が飫肥（オビ）への入口に当っているため，そこに山城を築いたことによる。なお，この北隣りに犬ケ城山256ｍがある。

宮崎県　鬼塚　　（宮崎県　小林市）

小林市は県の南西部にあって大淀川上流の盆地である。

鬼塚の地名の由来については，あまりはっきりしない。鬼が小さな山をつくろうとしたが，途中でやめたという伝説がある。古墳でもつく

ろうとしたのかもしれない。(役場の話)

宮崎県　鬼ノ目山　　(宮崎県　北方町)

北方町は延岡市の西20kmの農山村である。鬼ノ目山1,491mは，町の北辺にあって，北川町と境をなしている高い山である。この山の北の大崩（オオクズシ）山1,643mと共にきびしい景観をなしている。

鹿児島県　鬼門平　　(鹿児島県　指宿市)

指宿市（イブスキシ）は，薩摩半島の最南端にあって，温泉の湧出量が大きい。指宿は「湯豊宿」（イブシュク）からきている。

鬼門平（オニカドダイラ）標高307mは，池田湖の北にあって，同断層は開聞岳の西から池田湖へと伸びている（長さ14km，高さ100m）。この断層は，池田湖が陥没したときにできたもので，これを鬼の仕業と考えたのである。

鹿児島県　鬼の口　　(鹿児島県　穎姓町)

穎姓町（エイ）は，薩摩半島の南端にあって，戦国時代の武将である穎姓氏の根拠地である。

「鬼の口」の地名は，隣りの指宿市の鬼門平（オニカドダイラ）断層崖への入口のため，鬼の口という名がつけられたのではなかろうか。

鹿児島県　鬼界島（硫黄島）
(鹿児島県　三島村)

鬼界島（キカイガシマ）というのは，枕崎市の南方50kmにあって三島村に属し，大きさは12km²である。この硫黄島は，平家物語や能楽にも出てくるように，多くの罪人が「島流し」にされた島である。例えば，1177年，平家打倒をはかった僧俊寛がこの島に流され没している。

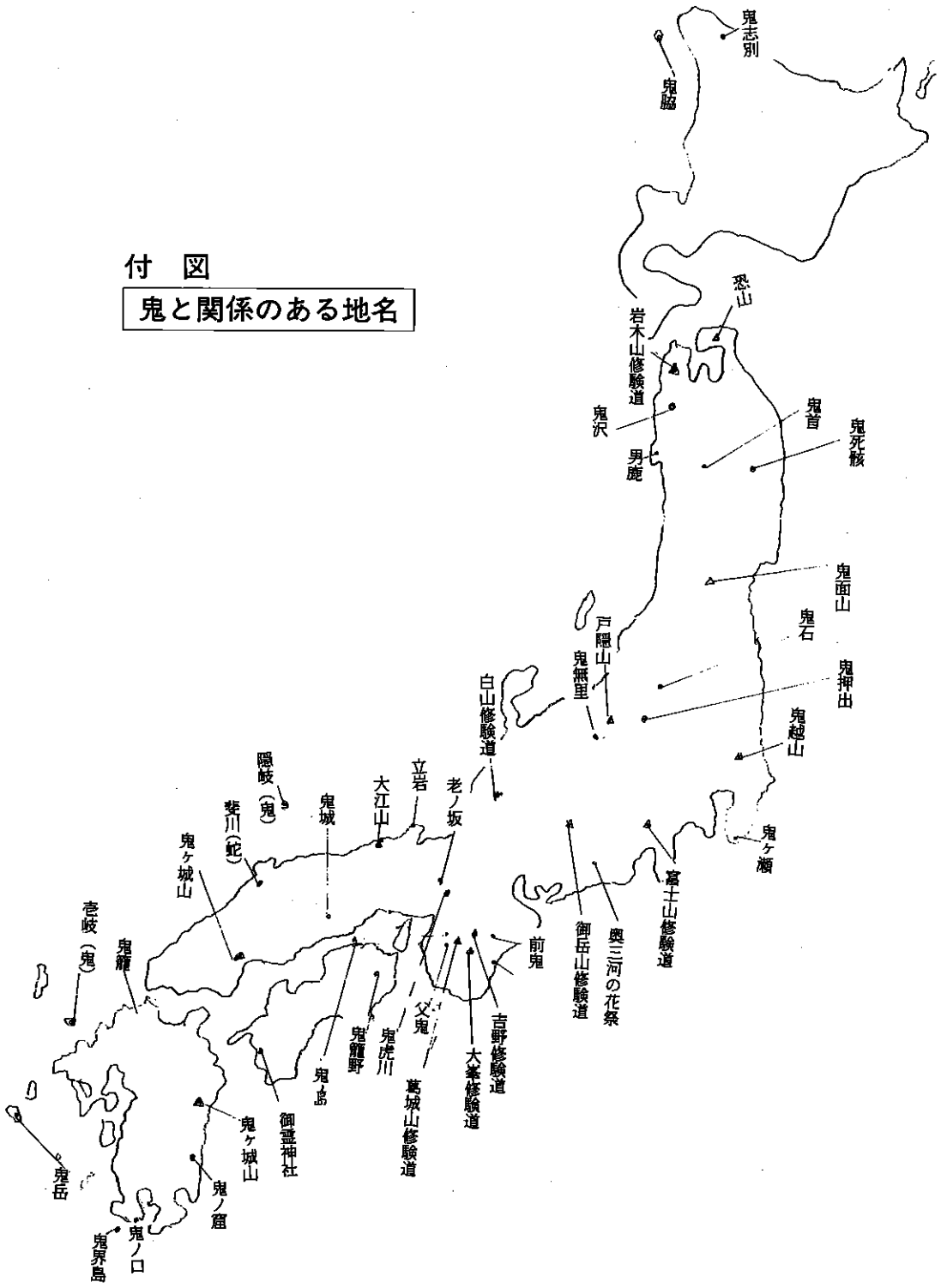
硫黄島はその名の通り火山島であり，温泉も湧いている。要するに，この島に鬼の名がついたのは，その奇怪な地形とか，へき地孤島性などの複合的要因によっているとみてよい。

なお，奄美大島の喜界島（喜界町）も鬼界島が転化したと思われる。

小　　括

筆者が，従来行ってきた農山村を中心とする地域経済論から，本稿でとりあげたような地名とか，民俗関係の問題へ関心をもつに至った動機についてのべておこう。その第1は今は故人となった実兄の小谷方明の民俗研究を今少し発展させたいと思ったこと，第2に，私の居住地である泉州地域の各種のサークル活動の方々から民俗関係の研究について刺戟をうけたこと，とくに物質民俗学という特異な分析視角をもつ若尾五雄氏の方法論に関心をもったこと，第3は，大江山に鬼の交流博物館ができ，そこで作られた『鬼の地名辞典』に興味をもったことである。

さて，筆者は1992年，岐阜経済大学を退職したが岐経大の地域研のメンバーとの交際がなお続いていること，又，名誉教授の名もうけていることもあって，特別寄稿という形で本稿の掲載をお願いした。

本稿でとりあげた全国各地に存在する鬼に関係する地名の研究を通じて感じたことは，今日のような物質文明や金権社会の支配する以前の日本においては，よかれ悪かれ，人々は自然環境とマッチした仕事やくらしを行い，生老病死や天変地異の問題に対しても比較的おおらかな対応をしたということである。又，科学的分析のできなかった問題については，一応，神秘的な「鬼」という形で措定したとはいえ，ものごとの因果関係を深く掘りさげんとする日本人の詮索的精神あるいは好奇心のきわめて強かったということを知った。別稿で発表予定の「鬼の社会経済学」をあわせ読んでいただくことを期待する。(1994. 1月)

鬼の名のつく地名の系譜（南）